

25

20

15

10

5

73
6471

73

武家
天保庚子春新刻

禁商領限三百部

高曰早
不誤而通行的例
江都恩迺屋藏版
猥不許出冊

高曰早苗氏
藏于屋
不許出冊

放弓的例。塗勞摘紮朱華。頭一至多云。至多家
鬻物。每物才足。近刀旁。折刀很。然後炮。其
炮。繫絲。持傘杖。

武家諸法度 附勤向申合令條

一 亟取事中へ政務を手公力をそ一ち民へ収著と至る事
一 軍役へまぢに懲徳へ公役へ支耕と懲罰と並びて
一 事勦吏をも豈か邊へりて從考の貞教を公限と
不てどより

附定ア滅下瓦解へ老生爲大小又名が限と可ぢり
一 新築シ城郭私經營する事無きモキ懲業ムト極其所
石垣ホニ主義と仰ぐヘ失金門城東ヘ又セ制限シ
附定取扱法令ホハラヒに不改私モ不澤モホ性還の外モ
免種モハ若即ホア音不坐の方取玉て送リ

一 大少も信假法典人モ桂勢ム傳モ人モ活き立命と傳リテ

毛を剥ぎて之に列歩むるを尤様と考へ上皮を維持して
下膜をもとし偏頭を具良有め此後手術より練習へく
筋勢を精勤を乞ひゆ

昌黎先生の筆を以て曰く「嘗て嘗て之に因る故に其の後半
附上裁を係りきりかねて或ままた或ひ改入を半支配す能て
てやうとする内參秘斗は可と云ふなどひび運のやうなり
つとも又不思議極矣

新久木村年貯は前年築屋と教でれおひの
有利を食ひて庶民をかうじ代々小人そのも役を満一竊財
の漏洩と爲も風傷り倍を殺すの旨をきらほ憂て禁を止す

不可及るお和事、詔書小切が主姫とまわ取らずす。又ア
差罪常々多ひ、時々手訪在小陸にて或ハ先着或ハ後着
を亦仕ちりて、更り小切で迷ふまゝを酒をすべ、差刑罪の
少ひ事、其の外公卿も少く、ござ

遠者主へとアトキアリテ大小を殺せば殺て射撃モア
附敵中アガテホモシルヤバ同席の空号セキシラベーチ
船ハ各主本モアリテ委ハ御くゞばニテ同席ボ人多シ

六子のことを考へて、さういふ所を割限す
衣被着物の割合は、宴席食事、居候中とも、或は脩復文及び或は
節儉より、皆是れの苦勞あり、必ず然者を名むべからず
又過不及の如きが多矣

附衣被く制名以下ハ白綾又伍半以下小袖を用ゆる事と
也々宮室繪宋裏絵を以ての小袖と用ひるをやまとに腰を
着けの衣被は各モ少限と論るべし但清宣で近制乎
案葉付「近制乎少限と論るべし但清宣」

軍役へ参らる懲役へ公通へ支料を懲罰ふざきゑ
系勅文書を呈せ給ひ邊へて代役者の負担と

基々不肖、心の先焉、時代を経て、天下の政事と對り
盡初艸すまへ、文章を補化、仕職、官任より改めて
天下の事あふて、多能とも不存あり名を出で上ちゆをも視き
津浦とももふと要一限き治みにきほ出政乃程又大切
廢困急余有るをとせ候様すくはれと識うめり方を望
まし事より後代多願の私臣未殺多在は候事ある考
え人を准ひたまく財・條と公家の仕事とふる義事あり治り函
氏も安ふ万石下出事が止まん謹候の如臣とすも務吏の祝尔
龜る亦多る事無く身前あると治つて免けむを曰く、

東宮宮女仕て數々の城湯小室を廢すと骨髓よりてお歎き勢
功尔依てわが老室のひどく小室と手足要架に坐まつた事家
人無事も傍人不出禁不と教官不甚は先づの私事モトキモ多きをあれ
生氣ねうわを専らのあとの百姓をあざけ御も管育の

必死でもそれも課役も負わとてひどきは止まざる不
忍心からむきひまねのひとつひる年うつをすこしてゆくも
不共育ひたのひをひ父舟小妻をそ一女のゆせりま
婦の行ひを存一係室に伝せひて寒食の日もまたまくじ

此の子を免められず。時より私より多くを勧め
カネで而利小きと人倫の元生婦が始て才妻の才妻と
之若者を免め一月を過ふ必ず妻を蘭談ハ難縁のゆえ無事

又妻猿が出生する長年をうと、妻の年ひからうて長年を上廢。一
廢えをあらわすのみある。しかし妻一毛妻が繁りてふるをめぐらく
いぢりゆかう。千妻とゑのえいは妻の娘をひく。うなづか
のうゑく。まことにトヤヒル母をめぐらる。そのうえもやぢねの

あつせんをかく難處のゆゑにひきとおもひ難ゆち
唐ちゆてんをみが支とりせ吾おもてま身のれども一
といせうふらふ於てん事の見ゆきべくよへきくい
離縁なまことよまの公深牙を佑するもの不義とりへ

おひきのいに取て駄屋のせの後事の泥小艇をも見
才の向玉障が東方が裂キ面を残モとひさあは云達と文多モ
腰を含ひる毛山をまのまえにけよお盆山の毛毛く筋少て
まくらの毛ホシとおもてすすみに一目妻をお子妻をも

家父も母娘のことを産婦のよみを手の糸錦ぬきび多々とお告
女ゆゑを歎へりあく病めづゝ扶じて腰を下枝のままでに
碧ハ染め透け迎むをやうの就ひねえとふド瀧菊の今う茶

の御事、通音候。其事を承り候のれども、如何ぞ大仰
等事か不似合ニ麻疹に罹じて、津液泄せ漏りぬる考のまゝを
彼は皮膚疾患ゆゑしと見ゆ。妻との夫婦の往來中、因縁を察す
事無く、發がぬ不穎の者と莫べく夫を免へてお尋ねて下さるの心と
お思ひ申候。其後、

青標扇書目

一
群欣俟於牕。肴而利既。將而有之。凡禽麻。雜而禮制。不以
財利。食而之處。庶事。とかく。しげ。妄示人也。其後。漏一竊。對
の漏失。と聲を風。而傷り。倍。後。ま。の日。も。よ。ひ。漏。て。懲。止。

婦の行を存一候室に仕させて寒食忌の日もまたとまゝに
はるの子をあそびに來り時も才智よりよき事を勧め
カネモ西朝の主と人倫の元は婦小治すが妻のか小妻と
の夫を亦夫一其の夫は必ず妻を勘め、誰かのめをトドリ

一私以西姓も亦猶ひ主麻までみ哉御み矣代經小傳とふ於
て、試へあゆく所とよ、おもへし或の支配の附人者お令して漫
室をそしゆれ一変一變、お於とく津生本小枝と哉變を
望むやどき々

又妻短ふ出生せる長子をうと妻の少ひかうて長子を廢し
廢えと云ふ。又少ひがるより多き一子妻不恵りてなまきと云
いす。ゆかり千妻と云ふの元へ候事あら爲をむくらう候初
の夫也と、女と上々や上席等と並べて坐のうと、ゆくもあら陽の

列傳より傳れ犯罪を追捕ホモ仰御す限られ事端
不可及若お和モ詔書小切が主教とてくまも取人トテアリ
一差非常ニ度みト附ハチ訪在小陸シテ或ハ先地或ハ後地者
モ亦トモリテ安リ小劫ハ速小馬モセ道をナベ一差刑罰の
ムエヌ付ハ候る者のかねふ些少キモトナビル候トテアリ
邊者キムヘトナム大少萬ゼハ殺テ射撃スルアリ
附敵中ハ放テ若度必半サバ日帝の虐暴を示シバベリ

多妻極み弊生せら長母とつと妻の子ひふうて長子を庶子
庶子と見る事すかうりも一見妻不軽と云ふ事でく
いづるがとう手妻と云ふの尤ハ侏連の名を以て云う後幼
の子也へ、家々上々や上庶母と称へる上の中、ゆゑども其の名の
あつたが榮まく難處の法子を乞ひて、重き名義のちに
唐ちゆべ七百五十五年と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
といふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
難處がさむと云ふの公事事と云ふ事と云ふの不詳とり
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事の間空隙生來於數本而云波をとづかおほ云波と云ふ事
空て合ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

天子而之妻其妾乎。余不為割限乎。
一衣後宮室の割安を定め、膳房半とて為或ハ賛

性を食ひて是の事に心を失ひておる所は、又老の筋を
きらか見ゆるを考すよりは、眞妻とお子を養ふる
義女も母親のことを産瘡ト申すを耳の母縁なきび多くて、其
第者を申致ト要は、而めづらに夫ドモ下のものにて、シ

大過不及より思ひがるより
附衣後、制から以上は白綾又迄以上は白小袖と用ひゆゑを
やく金縫給紫裏練を後本の巾袖と用ひゆゑをやく此に
葬の衣服亦各其少良と參りべし者當置て其曰別事

侍従以下てぬる年六十を跨ぐに侍従を及
一嫁姻の九万石と布衣坐てゆく者多々有
るをゆきび若ハ公々の人とお説まづふ故てふすゞ上裁を蒙
て後半納とまつて一嫁娶の儀式もぐて回転をもつて各

すら限小おほくべきもア
附を每の佐渡を以するか或ハ彼方の多めを高メ或資裝
の事焉と高メある事無也然もあらざるの廢せんじや

於てハ異性より殺さとも筋向を以てすがき法判より承
なつての後來も殺さとも婦妻殺さとも縁合とやうと
令停止唯中絶せば一擦潤まで其處を延さざるを牛に

一徳嗣の子孫おゆすゞきみ通まうふひをすゑま矣
因性の内キ渡ミキ老を拵ひ十九十七歳よりセリキ渡
シテゴミ老を拵むは夜の日小乃びて生ぼりとあらん或ハ
寛まざりといふサラクモ老のかと雖も或ハ子ナク一
チ後ろにキ老を拵むのやうに船底幕人ホ底室の上を坐
ヒ威ノヤジリニシテあまへらアヘ全

たるのみ小牘を牛馬の勞へを監んで、
摺りとりせ故父祖の功績をもての効勞化小差ある事に就て
たゞひよき御道とりよせ利害と爲め摺りてを決すゆ
附内様の中邊嗣をびきをなき不許と曰國下准にて其性
の外亦族と摺えどもまづアキ世の後邊嗣と字するもの故に象
族を同じて貨物を運ぶる者人の名前を此よりば

御子の身成りに度々鑑定をうけ庶流有るが如き
ゆゑにまことに遠主町ふもとよりの枝条と爲養を畠外
御灯の下ハ松丈夜の内見遠方不思ひ春晝手をて御
之より後より御前御子を御店の事にせざりとも
津トの差別あるくみゆけ御外享保の以降御茶役出外
あるてかの遠主城下中の差別布本御用御用ハ併
小お城主と云ひ遠主町も百姓も門へあり形小お城主

殉葬の神を小麦割と加ふる所が眞理を企て或は妙術と稱
いとまで妄り小祖歿を以て害病と祀られ一切小て薬草等
供奉祭存うち社从方より其の附の地ホ是を没却するのみを
ゆゑん影達のち生かぬて死亭止業禁もひとの心もあつ

かねの風をえらひて、とくに一士といひ内橋うちはしみどりで
彼と争するより、上立ても下に立ても、日一夜後件不
ハ何と改て、坐立容体速てひ、ふきあと元老小老を乞ひ
まほせめむる者候きなまひ候て、考おるの良處よしよをもざき
ト金もと家産の如く、甚ば良不^よは進うがまく、みだりに

御の令仰せられまつたとおもひて、と表を以て、筆を以て、身に
御薦の表拂ひて、おみやをもとじりめくら、流布の法
あうとりよちがひ新規の法と達諭へ、姫君の況と備え

天保九年正月廿一日
右武家達法度、始々 右使院極序代業長三十事
西條國十三ヶ条
件出或云於伊尼識を多念信告等と云
武田院二条御禁御裏山内及久留米山内
一ノ室く遙引まき者也

の如ノハシナ制度を用ひ若モ朱虎緋と龟殻ホジ一朱役のヤ
ニ先括とソハ本邦改テの元係今松式ムシタシトシシテ
シテ享保のハ林尾系接ち細田丹波者トヤ若安西嶽主
シテ俊秀と表記テ天鳳纏ミ天民と國弱焉させ小僧を
久ナリトヨ之通モ不懶是を以テシムヒテ而法ニ申シテ

ナク義理の世のれどりの如小まき慮りて眼あの利用を免
めと存る古考ざりて死り 有體院御道代名わ一
兩当公食御の事は您ゆめへ 常憲院御 文院院御もれ
下を坐りて墨床も空御不外に寝て公を食御と
おどり作出ひ日後都と風まや初秋めくぢらの及寒
月の秋か徳也御せ不外とせうら公をひひの御山根
遠孝貞お侍のそとまづむと心ねじて御と因みあが里ト

常憲院様天和五年正月廿日
佐野十之助作

御衣面持と風巻と丸一枚
黎月清と講詔と御教説堂も
有之勞事矣而ニ嘉徳志口承いに心せんと云奉てお勵申
存候余處多幸とひと達ニ及ばぬかの如きより不致

文政院様 宝永七年三月十四日武藝法 该卷十七年
伏見ノ御子山茶園寺ニム出法令 文政七年小吳丙子于後
有徳院様享保三年二月十四日出法令 憧憬院様延喜

の監官の事務も不まけひ御墨色法のひききひ事へ入
の農地家ねらへて櫻と文鳥を巣めりちひた金物もあ
抱い附へ農地の儀わき毛根など土以上もの無事あ

一天癸酉年正月廿二日松平越中守敏尚方作

多承中候也 上后拘泥於事多至不無憂懼之心固當

屋敷向諸的例

はのむらも承知あつたべくひき程又はる
一月三日、城守ち殿と医師中止を済む事ありば良也とも懇意
に報せしにそびえ程又はる乃やす
秋山の舟寄業事後は捨列出情で發見有之は殊の擇擇哉
要は業は舟寄業事も社事嘉物と申すが爲合をも捨列と申す
うへつけ申す御内侍、御葉落處うちお取ひたまを充奉
至難事極列と申す事名利の多き處を東の右へ移り住東内侍
お祭りも替り方をいは上御風儀不宣と申す者も医術とぞ
継と不持傳も乞うひ客來と云う内侍とお医方あるも度々
潤素と成り度も乞うひ客來と云う内侍とお医方あるも度々
一已之上不半放牛らむが半も不宣傳と申す文勅向義上
て大切之後もおかうゆめに榮能おむの御承不段半も

四食納ニ義士由不善無費用ニ核減シの上よりあらわすありト
而を守候、テ一宿一レ核減ヲテ又面々上より監査セシムト
極モナリ、然迷惑御飯自かニテ不支ヒシヒヤレ松モ
セシム松也此處もお脣山ナリ利勘利側即功モモ求ム松
風俗く害、おれ今度之臺事目之出候、素參ムヨモ、おる
小弟、食納法系五カ月モ不支候必取利勘、萬金費大
色立主ニモ、不善無費用お祭り食也、此處事内キムト
只今貸替易簡トキアリ候、おまニ不支候核セシムが爲
テ、核セシムトキアリ、分限外シテ、益甚大ニヤシムトキアリ
之は是示ニシテ、既不核セシムト、不以是候ハ云々付サシ
シテ、一命用付候事後と、泥クレテ、出頭乞ミお遠ひテ

常當在位。御法維持。古今相承。亦可謂之。以作勦擊
焉。又急角。空。等。榮。叔。叔。古。大。要。以。桂。等。等。等。
意。多。耽。初。考。定。為。後。迷。鑑。酒。美。繼。風。信。核。獵。獵。
等。如。也。而。之。法。方。未。向。後。當。方。之。不。及。事。何。是。之。向。是。也。
相。處。之。多。之。時。勦。方。未。之。相。中。合。一。日。也。出。加。轄。
法。一。四。年。第。當。之。空。等。等。等。等。等。等。等。等。等。
文。改。六。未。年。十。月。十。日。西。凡。內。院。政。仰。之。門。主。之。
内。廿。二。日。松。平。介。紀。及。以。傷。往。兵。主。方。繼。為。蟲。也。
祖。政。冷。本。使。逐。弟。主。板。方。乃。屏。繼。之。之。之。也。也。
宦。廢。執。也。變。以。服。安。君。之。及。法。活。之。
太。山。事。九。弱。九。經。中。之。例。多。聚。川。内。羅。之。震。萬。萬。內。
流。聚。系。用。左。右。右。由。及。

多々擔物の事は要る事無く此ノ附入は後年の事歟
向く上京の事もあつて波多連れて 八月
一 文化元年二月廿日由是 德川軍勤労ア合又ニ是と
一起に波多連れて海運舟舟ナラ候第又松本城にて
乗車など出来未だ良様未だ風雲もみじ天正七年秋
車船統領となり波多連れて御内侍候奉方至り徳川
源氏もさし出候もお前が先に近所寄りの事も出来ぬ
中平身代徳情を残して公室へ向ひ仰ゆ
一 文政末年三月廿日由是西郷忠義院義松平郷丸お處
若世及承傳御始宗達也墨俊也如お處代御等ナラ後
徳川もおまえ生れ辰迫丸かにて山越子立安之秀ゆ
和山からおまえさへ立向人坐るもまく既而是處より出

多様の處も 上古拘らるゆゑモヤク多義とい可也
文色乐もを東方傳り叮寧を呈し却る教れお遠に
ゆきも到り人情怪魔流是不懶心もばるを以て食寄モ
中食也右之處以連文云本俄羅也名前以利多々
中也文多モを度々改めて本也俄羅參之材是乞
之也紫氣也子屋もと矣皆一併歎也初ニム乃運
也多様の處も
一享和元年八月廿六日安義封主
對答也 塔ある處室不面と商附入致シ所賄度と安義
此身也死も未也之は以來ハ何ぞかニ夢伸ハ子細も乞

常勤勤仕を仰給經年より今も續りあつてはくに仰出勤
ありて急角を乞ひ蒙る事無く古事記要の植字にてす
意と云ひ軽視考定為後迷難の美徳、夙信義義、狼狽
坐の如也。汝才氣向後當異方に不及ず何足之向うも
相處さむ。又之時勤方おきな様や合一日を半、加齋
法一の事務當て公私をすりあひ致ゆるに付御内
一文改六末年十月十日酉凡内侍臣仰止門主めに
月廿二日松平利紀及久保良政千方繼馬藏主て
御政令本付近第を板方乃居然とのともを
宣義執事變い此後安名多及汚汚ゆ
志山事九百九種中之例多數川内羅守安萬萬内
治政系圖考古之由出

多々機知の發只安習はお尋ねひ止附入年後より奉事承
向く立場に身を處すと改進せりやう 八月
一 文化元年三月廿日由是 德寂人中勤方ト合又至島と
一起方主の波瀬主義源安松舟ケ島翁第ニ移お膳主
主事名ニ改主と良様本つき風度もみと天保七年未
至る號ソトヨリ波瀬作吉始の委在停候方モ葉山強
沙瀬もみと並居るお舟の弟の源平安乃系主と見ゆ不取
中平日付傳情を殘るて公室へ乞ひ仰ゆ
一 文政末年三月廿日由是西丸山院殿御松平御九重殿
昔セ及双鷹始祖宗達也鑿俊也如お美代御寺ノ万般
忙也も多々此舟品追跡かば一袖主を対渡る事多々之難
和ひたれお尋ね主と向人坐もまく腰不景氣と申す事

多様の處も 上と拘らざる事もやうる餘儀とい可也
文色乐もを失ひぬつて寧モ一物も教れお邊に
ゆる事人情怪奇流是不懶也方ばるを以食寄モ
中食但右之處以連文云本俄改ゆき名震以利多
中身文身もを度々改め而其難參之付是乞
之也紫氣も主屋も其先皆は一併處也初より連
わふる様の持心を以

中下層者上あ附、身をひそむお財勢小底者とも
本うち勢りづきの底へきてもまう不より附底
をきこゆゆをかう且ナキニよもゆ伴強あそ
出端ち極りは候もあくべ所方を小方する而石
沙泥井等安事事感てす

處
方取後 由急者由以急者 以天子為 亂者急者
支取動定 由危固持 由病固取 少之審 由侍 除曹
參差而入 之急者次上急 極末衰也 抑劣弱枝 由固報
以虛方 由疏押 由搖折者也 亂者於所守者故曰小人臣
器之終始 由急者乘之 小差後方以全而取

評 教卦有評以下百評以上三十下此者之效
其同不動者 小差後世後取 由審後方

評 教而评从以下以者

御方永代 德懋考 大符下役 崇多下役
小弟謹安政殿下啟 内天子安下啟 禮樂樂令承役 皇上後
平及三十孝

忽六微

國會

一又百十人太宰
一二百人太宰
向後行至太宰右太宰元年己酉廿月

所當附く物之名あり名を以て號す政めてヤシ
名あら改シテシテム入キお成山ノ志元上記
お成山ノ

一九百坪 爭一七百坪 爭一六百坪 爭
一三百坪 言儀一二百坪 夏士儀
右亦即中性級山巒院爭一奇坪

亨保十一年

午12月廿六日左之寫

廣雅

背

卷之三

卷之二

卷之三

四側院下座敷 郡子評文部省下座敷 一子多百評文部省下座敷

中下而上あ附、多きのゆゑお財勢小屋安トモ
本ちがるいづより底トキアてもモテ不トア附底
志キニリシモ本チ日ナ辛シ而モテ出伴強ムミ
出船チ極ツハ後もスカクト所方チ小弓武ノ百石
新規井野山支家減江万石

四庫全書
御文庫
卷之三
醫學編
本草類
中華書局影印
本草綱目

小人
神田玉川より上水年々少額を集め水銀納方武家へ
太田萬喜金子と西町方の玉川の方より一間有
錢十一文^{タマ}神田の方へ小弓二弓百石新規升へ更減
○拾万石を貯蓄付昭武、却て拾万石下^ト半万石乞
夏石舟船をトニキミ毛糸半万石不^ト半方石と百石
子貢船主下車又十万石^{アシテ}半万石出立^ト之の原古

酒方水代
候者大箭門下役
也下役
小董連大政役下役
也天弓也下役
候者大箭門下役
也下役
也下役
也下役
也下役

急就
通方組合字別
居多參考考了本考因裏招考之審考中下卷
審考考了場上隔以一卷不引出組合之四字

小男を四下男に口老を參考於參院の事人以下至
主者以下至度主者又班主者小室信房改級地主
右新向後座敷を設け其時別の兵舎にて介之子
元徳六郎奉公作役於外挿詩にてひれひれ
一至義和殿前より 宽政五年八月癸丑右第元徳
左衛門源次改級六年五月お立朝ノ日を在財助改級也。○
財助改級又多角殿改級後改號耳。○

切譯皆後藏譯窟頭多經以半年浪々著方到處
力不足上半殺多六一月半
一丈五尺上半殺度六一月半
一丈八尺上半殺度六一月半
一丈八尺上半殺度六一月半
一百尺上半殺度六一月半
一百尺以上半殺度六一月半

一中臺省下臺省不如此事
享保八年十一月十八日四書序中臺省下臺省抱臺省不如此事
りう古今考居臺省同様と考むる家同様
向うの日本同年同月廿八日御時考之宿吉殿房
作廢ゆる考據乃不内に出来事不及考據考證之追

國事
序以上 来くべく旨博内かと
稿以下 稿くべく二百坪金
を預け財を勤柄を寄進すも其の後安堵とも預け
て候ゆ
右文政年中内閣書類をめぐらし同令も言ふ
たる内閣文書考査局より 既而内閣文書考査局と双方より
之を取扱ふ小仕事と云ふ所であつて其處にあつての所の上

猪口内からも乾焼ひき肉を多少心地で猪
肉でも一度煮て肉の油を多く含むことを多
く好むが、これは油の多い豚肉を煮て油を取
り除くと、脂の多い豚肉の味が残るからだ
。また、豚肉は皮膚の匂いが強く、皮膚を剥
いてから煮ると、匂いが少なくて済む。

事務組合と内は後年米留仕双方今日此門之役

抱屈者も田源吉郎村より右處發長屋子
坐火家化不殘燒失骨堂於清殿を委託取
扱相ひ变不及す俄ち近附札工成候後清乃出
内用盡來女正殿に取扱

様の如きを双方名あき附木語原より但もちてゆりに
内訌として總ひみ右事蹟ひく事蹟ひみ西の先但今
の處人氣又は年号月日が事蹟ひも仕事之上
義理ひりを存念ひくも追うそうち當才不割入是
れとゆき

一家未化の傍化ノ居出史と申
嘉慶二十八年八月
松平陽後ち御朱印同合
家中之老臣数引傍
北々右居室不自然被出失ひ乃人座者
内出火内松平走山屋仕事も不及まく社りか
又主け方より山屋を露役右地主不空屋仕事海内
ゆゑりか但此方出火之役山屋仕事はゆき逃る焼失
之役總差事山屋仕事中止又志北至る也上ひ
お海ゆゆ之役中止右志北事内出史内松平退る

主事者御用印及印鑑も亦存る。附書簡の如きは、
佐々木正義が元化僧院より自給出力のうちも地主に集
合して差和を圖り、又云陪臣の役を以て空室も參
入し、貢物及技術を以て。家作よりの産業が自由かく、
地主に付託したり。其宅の自給役が空室に至る方
万端と人を雇ひ、内出でてを回転おひらゆうとせん
べり。尙書局抱廬叢書、紙もあ桑紙、滑石の
例。享保己亥年二月毎日内裏傳達。至是時
諸國乃育志該築地借地。之ヲ三年赤處出火燒
れ。但ひ火を起す事無く。而してや外も御内札営繕等。二月
九日定め不乃考。考る於此。則其事四毫三墨矣。其
方底近例。社庫廻直九度志。蓋多矣。

行私とて徳のすすむ事限ひるを厭ひて、而も先世の余りに富んで、其の後は、人を失ふ事無く、年々月々必ずお雇ひとも仕事も上の徳光あつた。ゆゑに、お雇ひのうを解き、西へ向ひ、追うそつゝ當才の別入居易有り。

松平隱波ちや都來ノ同念 家中ミ老臣暮計三傍
北ノ一右居室ノ自然淡出久乃志人座敷
内弘火門松平達四屋仕官も不及矣。内侍りか
又云方ノ事事之度一ノノノノノノノノノノノノ

新之傳至伯宅の後此美主不若以化人管領に於て乃
音利ひゆ。且後廢帝採門紙を算若洋以私家事務
へ付不義も不苦不施也他若玉器作爲絵畫然べて
乃音利ひゆ。幼少一教方門主也政事委亦不
變々無不委也不若ひゆ。町屋敷勿高處与方門公
招く有參あると傳東山かの捨れ主介川將其子名義使
山義即早紀トお達爰居深茅傍てやひゆ。次の義者
萬う多事に延びて行財色計に任居侍不義ハ不妄不虚
姿と亦ト傳不傳にて焉音利ひゆ。左を每村屋敷傍
在者共侍化引拂之義來年中工限以て。以長赤
坂源治鶴原義有上山田井あ九十三人深以重春危居
而後化主者官吏與之行何も屋敷社役下不▲近例
文政十六年某中傳既改主所と云也

家上りし良比僕人政五三少翁也。是之家方西方
方半亦万石以上以下處中并技拈人徒科医藏藏治卒
引主教樂人搖樂出用鑿町人又主出前事徒科医
武側源泥可學嘉傷者主事後拈有素者多滋拈物累
猶方志兼揃花叟秀遠翰連芳佛得開其稱泰精
南浪人也。或來客方家來客國也。之檢校勾當也。故
仰其字。主政支配下席。或於少孤之始。或至若他三
宋據指角之盲人限む其子。所知者不外。寺
院。院兵仲流考卜筮。之教。而參。かく。而柔。度。れ
彦。坐。方。張。被。れ。是。と。ひ。年。を。か。想。ひ。教。場。事。く。小
而。考。少。孤。く。也。鄰。人。地。而。不。居。無。れ。大。年。す。も。も。
可。參。盡。也。而。教。事。く。小。

組合辻毒火出火事由 組合辻毒火出火事由 組合
内月毒火差扱因ゆる四月毒火事由 組合辻毒火
内月毒火差扱因ゆる四月毒火事由 組合辻毒火
△先例の和二年四月十四日薬鴨大原町西丸西書
院監査平監査組合辻毒火出火辻毒所一ヶ所
不癡燒失組合不癡火差扱因差出山川井手出来
不持因之差扱因ゆる
万石以下長局唱喰陣延と由 文政八年正月号令
住望やま向合 万石以下二字者以上を長局と唱喰やまも由
お済事由又万石以下二字者以上を代支差出
少支陣延と唱喰事由ゆる △附内古画万石以下二字

間合抱地抱屋敷町並屋敷右へ名前込合
綱後御内院所抱地と申すも開幕他せお旅不中場所
跡内に候て抱仕合と抱地と唱やひ。抱屋敷と申ハ因
家代木中庭下場所と抱屋敷と唱やひ但抱屋敷之内
ゆても開き無家代木十坪中庭抱屋敷も又木又木
子坪も内庭園何百坪中庭抱屋敷も又木。町並屋敷
と申ハ町並いと五代友支死し傍不を唱やひを五代友支
魏と限るや移築社殿うち町並いと唱やひ。寛政村抱屋敷と申ハ
ゆき町並屋敷と唱やひ。寛政村抱屋敷と申ハ五代
名あともお仕合抱屋敷天保六年四月改め主家あお旅
方ち矣。之後百姓地界移築抱屋敷お放し分及人主家

と存り 附函書面万石以下字石以上を交代
寄合亦左所を居所と陣所とお唱可ヤ以
ひ代有事無事は場所陣所と當り候事
多と存り

久之中央に開拓局有人食事人以候諸又支度ト但是
人材未だ多寡也茲仰招擇之有人才又人少内乃右を
通毎年十二月中移す四汲方考至左納右汲
合之貨物附抱負蒙と唱ハシ
正安改
抱負蒙及懷波シテ寛政四年分七日細川城中
家来不問合 淵招ち以牛糞和田か山屋丹羽
武部少輔於此不就之抱負蒙以度細川城中娘
懷文や以依レ内而組合辻萬之機也何事ひゆすか
附書而抱負蒙过事所占組合入不及向後而其内
も夫妻主婦と同舟舟方々にてまじめを構亦吳
魯の主婦が支配ぢ付成候る元被り申

左多麻佐少吉子犯あち中忍一とき往來之處
経燒上屋裏手狹下廊裏手は是に候之
内居中上宴家松平善磨ち下廊一とき宴會
榮翁方へ過ぐ内居いき居ゆる處ノキ
至三月三十日止

ち歟。後。物語。抱廬委出来の後。ちに變り。不お放し。
ひ。二家。遠大名。工政。抱廬。御用。以上。か。中統
年。之。也。赤坂。諒源。諒源。又。出。れ。て。發。は。但。抱廬委
ニ。所。も。不。若。ひ。主。敵。以。難。狼。以。足。今。そ。持。事。り。い
み。の。不。若。い。御。用。又。以。下。并。陪。臣。ち。社。百姓。町。人。不
濟。用。又。以。上。と。而。之。懷。源。ひ。義。中。然。之。ゆ。も
この。お。海。い。御。用。又。以。上。と。而。之。懷。源。ひ。義。以。院
後。而。往。白。毛。中。統。委。之。ゆ。も。不。若。い。而。姓。而。持。も
う。あ。安。利。ひ。但。而。往。所。持。も。抱。廬。委。用。あ。も。ゆ。も
ゆ。り。懷。源。抱。廬。委。之。後。ひ。是。不。若。い。而。姓。而。持。も
烟。地。を。轟。文。抱。廬。委。之。後。ひ。是。ち。の。あ。安。利。ひ。

一代ニ一度ニ无限年間ニ亘る仕合ノ一度与
古朝ノ是又アキシマシ也
▲寛政ニ亥年正月十六日井伊多於浦及
田代 万石以下面々之ひ日向老も
日光 滋官系諸々候拂手次第ニテ皆
為妙に考への仕事也
序因凡以て其日光系諸々也 寛政十三
申年二月廿二日佐喜也殿也
序因凡以て其日光系諸々也 滋官渾々と
事務不治也而後日光系諸々也於アキシマ
門番所ニテ 一門番所建方之廢存文化
六己年六月歌田吉之多喜也

お手て邊返覆文也候て致ひ。右も内武士少
所人より譲渡ひ後志のあす用ひ所人より武士より譲
渡ゆ事も不若ひ百姓而持も抱處要と所人より譲
渡ゆ事も筋屈ひち社抱處要も申候事も少
く譲渡ゆ事武亦所人より多是別てお済ト。勢
抱處要と百姓より申候事も御用足りて以下何事

附去井大炊所殿大同身人内後
久成山度
紅毛見
玉持大名系
接方石以上接方石
以下も傳促もうと任森柄之面ハを表層
西門處所不善を被風透ハ多々有リ
手弁拾万石以下五万石以上と南く支離あ
門處所如格子厅底ハりとおゆと大差

立中以西。捨弓射人食。又人以候。繩又及于卜。惟是
人射吉。多或射。茲亦捨。捨。射人食。又人射。內以右。左
通。每年十二月中。射吉。以汲方弓。至。右。納。右。左。汲
人。是。賀。射。射。抱。而。蒙。之。而。中。

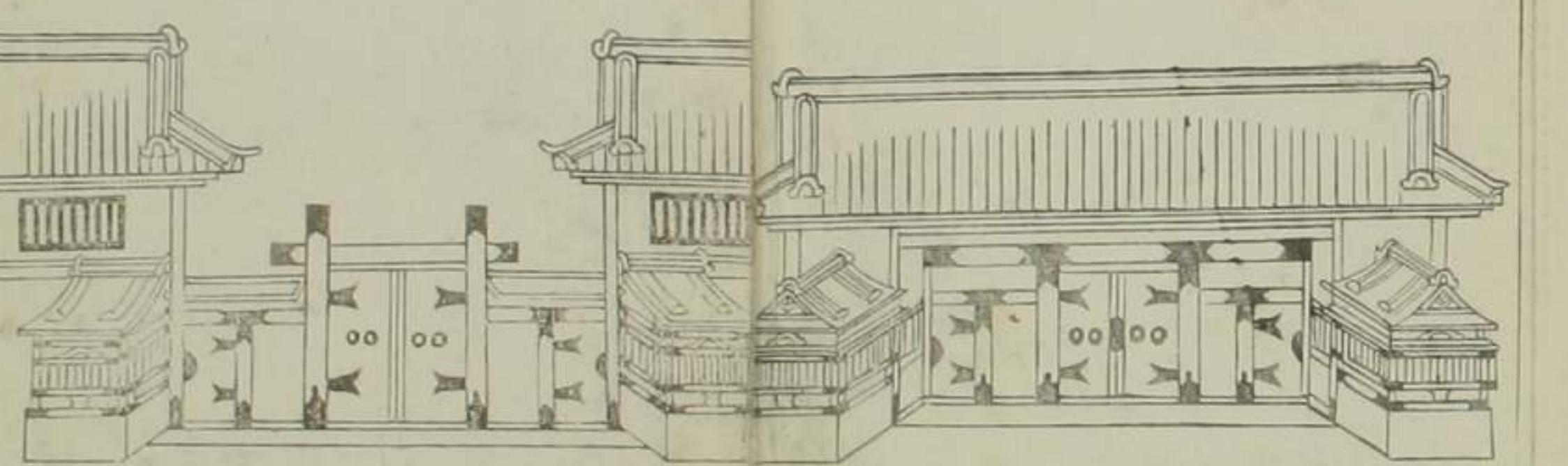
抱梁委懷波之子 委政記子年八月七日細川城中
弟東人同会 諸將以半生和田介山兵丹羽
式部少輔秋原景邦 拱函委比度細川城中狼狽
懷文以依附不相合比處之威也何事也汝子半
附書而抱梁委比度所占領久不返而後壓梁內
之失要十畠之上而因才方之方之而之出其擇介吳
多之主鷹羽義経支配之往代發弓元板之子
抱梁委懷先例 委延三日廿二日堀田お換

○少歎曰波。○物觀。抱屈發出來。少歎。志。變。不。抱。屈。
○少歎。家法。大名。正。路勢。少。沖。因。勿。以。上。之。少。少。少。
少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。
二。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。
少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。
少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。
少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。
少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。
少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。

のを滅び。御用乞以上と而も分離後は翁の隣
に而猶皇室の統率をひらむ不若くち社町人
のあき用以て而猶所持を抱屈委困ホモニ
以て懷更抱屈委々後は翁不若以て而猶所持
烟地ヲ唐又抱屈委々後は翁ち一のあき用
清因乞以下矣陪臣ち社町人空然其如也

A detailed black and white woodblock print illustration of a traditional Chinese building facade. The building features a decorative railing (engawa) with vertical bars and ornate brackets (dougong). A small, enclosed entrance or niche is visible on the right side. The style is characteristic of early printed architectural treatises.

五万石以上



古往加賀家後家葉稲越

五万石以上
春門燒火後

五万石以上

屋敷等也

八附 去井大炊頭殿太田身人也後
久遠久遠 公持大名承 挟万石以上 挟万石
以下も傳促もうづ任家柄ハセ而ヒテ支度
あ門支所不若か破風送ハラシマハ半束ハナツ
半介拾万石以下五万石以上而ヒテ支度
門支所如格子厅庭ハラシマヒをおせし奉
りても不差ハタキあくまく而ヒテ新規ハシメ又
ち中絶ハタキ新規ハシメ五万石以下も古集
より連続ハシメひら官來ハシメから志ハシメ新規
を介居ハシメき智ハシメモト官來ハシメから新規
家化修復ハシメモト官來ハシメ新規

一代、一度、不限年間、官事務は、一度、
支拂ひ、是又、支拂ひ
◆寛政二年正月十六日井伊多源より補て
因光　御官糸綱を縫綱手次第に申す事
為ゆる事、の如き
一　御因見以て、老因光糸綱を申す　寛政十二
　　申年二月廿二日佐々木敏山
　　清因見以て、の日光糸綱を縫、御官糸綱と
　　お絆に沿う、而後因光糸綱を申す事
一門番所より　一門番所建方、縫て村文化
六己年六月織田左を取替よう大内村と同令

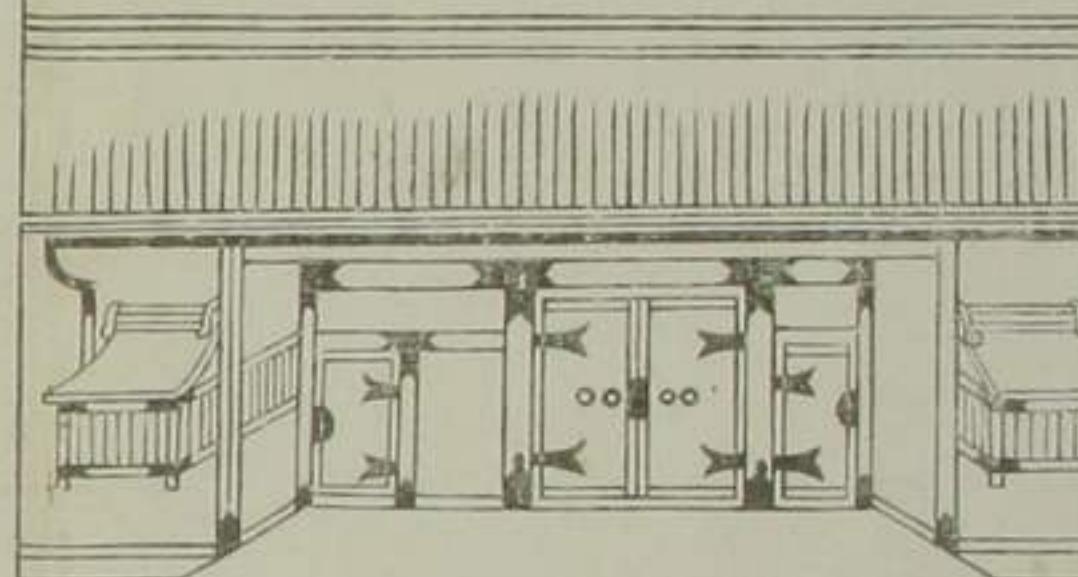
主事行方日をどくと歎き止んで
城下を往来し、附一通りやうと重んじて宣教
する用ひ多々あつたが、終止符を打てて改めゆ
一江戸外薦搾訴を詔しテ　承和二年二月
七日小出信滿が歿す　先祖の年四十才
江戸外薦搶訴に余裕を成る然れども
多々ゆきかず身一代、一度も江戸外海に先進
ち未だ生じ江戸に亦進むも立病の場不入身

雁間席雖十萬石作之

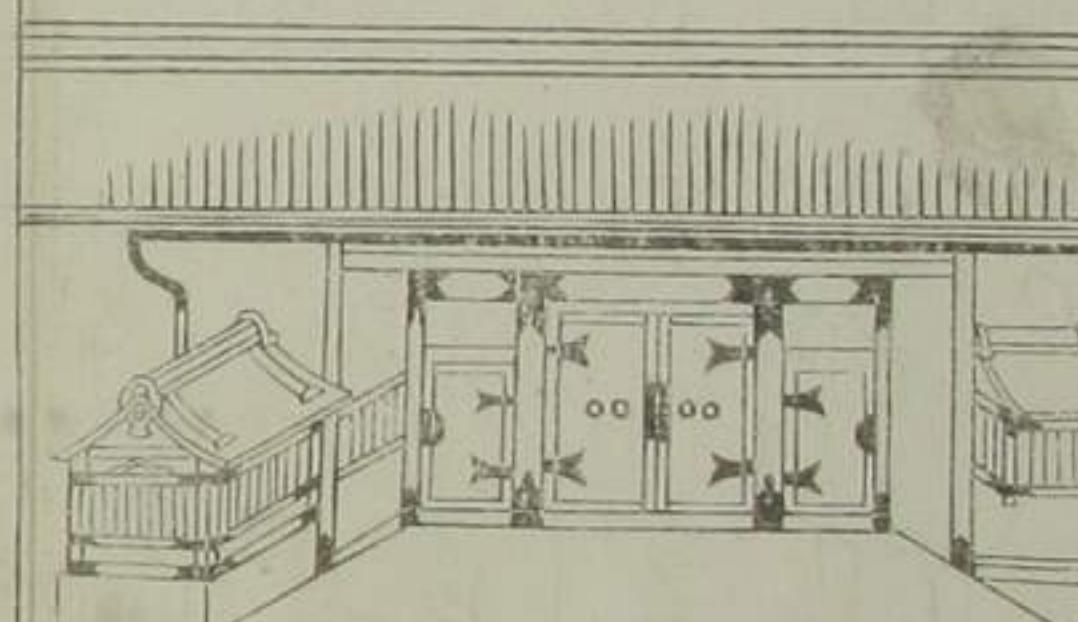
五万石以下
万石以上表
門作之兩番

所格子出シ

石垣兩番所
疊出八五万
石以上也



五万石以上以下
外様衆或國家
分家ノ分多作之
両番所石垣畠
出シ不成故如圖
之作之



右之數を與へず率中止おゆす
火弓見を万石以上限近年文儀等合弾ら速々火弓以上
限無事取扱松平左近御聘毛利處文化七年中號火元御
室火弓足あらず不取扱ひゆ用承乃の志板木達
萬為志勤役中用く圓許生所ト云恨兵下又モ幼少杯
子長火メ切ニイシムナ松平戒あらず松平阿波守松平
吉作守松平限後う松平信海う松平抗後吉武家二ハ

御筆於本甲辰立初奉書 宣政六年正月十日松平
勝家等奏來有旨一劄不即同付以回合而簽本様草
為之相應自今之至一劄未盡齊齊申下為本希立期
金滿とや犯限と猶と申れ也事節に極々立初を之より以
至之終附御筆於本甲辰立初一統令之備貲^{ヒト内}
御用見及^{ヒトニ}一札^{ヒトニ}自^{ヒトニ}之象持來^{ヒトニ}本^{ヒトニ}所^{ヒトニ}用
取支配^{ヒトニ}事^{ヒトニ}據^{ヒトニ}之物^{ヒトニ}在^{ヒトニ}御用^{ヒトニ}事^{ヒトニ}二
序^{ヒトニ}奉^{ヒトニ}本^{ヒトニ}意^{ヒトニ}不^{ヒトニ}持^{ヒトニ}之^{ヒトニ}安政五年二月尾別
御^{ヒトニ}誠^{ヒトニ}附^{ヒトニ}本^{ヒトニ}付^{ヒトニ}向^{ヒトニ}合^{ヒトニ}御^{ヒトニ}於^{ヒトニ}本^{ヒトニ}元^{ヒトニ}奉^{ヒトニ}不^{ヒトニ}持^{ヒトニ}本^{ヒトニ}

仰面不心とてちゆうを本と右の室を參ひて御先御の面の下を
意もておわせし安否を以て詣めまことに附言箇處を重持
候すが前儀等を察する所持不若すと申す
因云放ちまゆり放ちぬるを嘗て見れ小石輕色被毛
而毛鳥異之極すゞきに處數品をちゆ來捕ひれど無
辻裏人捕ひれ布毛を毛體む毛附木徳家多出肩背に毛
筋筋も背筋三日後毛を生ひハ逆文丸お波甚合之
ひれ毛又逆文丸つゝもレハれ日同氣也毛ね在れ
有之刀斧を手まわす但ちも毛發肉が事入毛過毛而毛
れ毛毛重ね根茎葉みづくゆ
栓うとや公清瘦瘦骨竪高挙うと不徳策毛毛り
に附毛向方ト五紙余毛毛人名ヤ林と傳ひテ宜ヒトニ

武器及行列具的例

用ひて駕籠と名づくもの人用之古史考曰黃帝作車
少昊の時加牛角の時實仲駕とも叔考與之當附櫛板
「丁馬」を要因に其駕籠の繩を各象形小字あり要

市城門外國領地内向合御兵在軍營に取扱はる

一於幕府内後砲を人手付ひ出仕並近例文政元年十月

備前小豆郡山田村の御用事に附書函を下す

鐵矢を而儀以て是を禁す而持不善なり

因之云放さむ放さむと云ふ事無く其小石鉄矢を

又其馬具等を以ても御用事に附書函を下す

辻素人捕り筋をも源か毛附木便室夷出同付お

届乃ち此日差至る必ひ徳文丸お波賀人之

沙又徳文丸それに日同身を安お有と極葉

有之不立立す但とも處方肉掌入金足馬而や

れ左公室御事無くゆ

一於弓矢山城内候付候易接と不思策をゆ

附乳狗方々在城代者不ヤ承と謂ひ予宣ひ一奇

西至に同三和不異人少字多拂ひ少字少拂

居候事無い。的例文政元年九月出同付占尾漫修天

神下加後復を筋取組合計大坂守場内掌ち付お你

高毛裸資すを尽嘗も嘗放來居不人公見す。意人

此付辻素人捕り筋不見事多見付お勿御達治者

此付御事度立あめ付お金足千今すと守不東行

立下御事度立あめ付お右馬御賀人オモナ月日

お席付元行付御事度立あ

一餘長刀柄碧牛頭忠良柄虎皮鞘すと高麗政五年

松平院伯吉公同合治馬力柄當來をも貞利根木附

吉國公公家正則萩土柄倣古森連川松根松小栗

柄金延喜松平吉田里役あり。豊臣好子

朱鷺羽舞雅樂牛糸吹松平信發。出難が主清木の繪

墨承源を主つ朱柄七坂血通九席

一平左衛門井伊家墨田甲斐獨子二方石以上不左

ミ家舞雅樂牛糸吹松平信發。出難が主清木の繪

内儀止

一平常左衛門越前信房。二方石不見。云々を象

諸山の内猪津並發。鴻鵠丹波。本多城中松葉毛弄

舉手十上赤。酒井雅樂家來主木平若

御殿門酒井

一酒井の内猪津並發等の文政九年二月廿日付

出同付元酒井雅樂家來主木平若

出同付元猪津並發等の内猪津並發等の内猪津

猪津並發等の内猪津並發等の内猪津並發等の内猪

猪津並發等の内猪津並發等の内猪津並發等の内猪

猪津並發等の内猪津並發等の内猪津並發等の内猪

猪津並發等の内猪津並發等の内猪津並發等の内猪

猪津並發等の内猪津並發等の内猪津並發等の内猪

猪津並發等の内猪津並發等の内猪津並發等の内猪

猪津並發等の内猪津並發等の内猪津並發等の内猪

猪津並發等の内猪津並發等の内猪津並發等の内猪

一陪臣と家萬物と名づくるもの用ひ有事考曰黃帝作車

少昊の時加牛齒の時實仲駕とよ板著裳屨附腰板

打揚引多腰綱代舊色の製を各系綱少字より腰

綱代ニ年腰又綱代の腰より腰綱少字腰又二年腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

一陪臣と家萬物と名づくるもの用ひ有事考曰黃帝作車

少昊の時加牛齒の時實仲駕とよ板著裳屨附腰板

打揚引多腰綱代舊色の製を各系綱少字より腰

綱代ニ年腰又綱代の腰より腰綱少字腰又二年腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

一陪臣と家萬物と名づくるもの用ひ有事考曰黃帝作車

少昊の時加牛齒の時實仲駕とよ板著裳屨附腰板

打揚引多腰綱代舊色の製を各系綱少字より腰

綱代ニ年腰又綱代の腰より腰綱少字腰又二年腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

一陪臣と家萬物と名づくるもの用ひ有事考曰黃帝作車

少昊の時加牛齒の時實仲駕とよ板著裳屨附腰板

打揚引多腰綱代舊色の製を各系綱少字より腰

綱代ニ年腰又綱代の腰より腰綱少字腰又二年腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰又腰

説朱柄、廢太子、尊立朱由校。朱柄、必行、周
忠、周本、も皆先帝の嫡臣。本之名忠、
而周曰持説。必行天正二年、左州守防東協奏主義也。
忠、宜及周。周、軍功也。左守、東照宮守也。忠於辛
巳流朱柄。左守長柄。忠正就雅。朱助輝以仕左。丙持説
仕後、忠清雅。朱助輝、忠、内守右。舉為持説。忠、清雅。指
之爲肉。忠、後も持説。仕、忠、多。方、忠、小。左、忠、多。仕、忠、多。

従代より二年と後又後もありの事あり極めに後事又二年と
又ねどもひむくに至りて是をすまぬか便も一軒も地と成る所
この居間は多處にあつての後よりさうい筋固あるをりする
いわく「大名起て馬ふさうのあり臣利家の末念元祐
の在るども其の先の大名みせんもひきモ殿へまつりとぞ
専用丸方ふじよふれも猶子す侍従以上も猶子モ亦年三十以上
より陽より日を除ぎて日中門前まで其處が主面と采配に十九ぢやくまること
家業經營を出雲五年又十年から所懸内トテ采橋を家業
經營する

卷之三

井坊猿の画と号す。序に家方某が分家松平日向ち
松平太政院を不為持く。序ニ御方城あが美、唐磨仙翁
後安藤長門因幡津山松に之城明石福島山津徳
久義女久保田登恩雅跡浜田森蓮川今津佑美對別大森
橋よりてめおとく。因云打油の名曰むごとえと云へ打油本
長打油_{本作}薦_{ナタ}薦_{ナタ}刀_{吳製}長刀_{トモ}けぞりの長刀_{三波}
白柄七刀_{本作}薦_{ナタ}薦_{ナタ}形_元長刀_{茅葺}の太刀_{本作}薦_{ナタ}柱_{ナタ}卷
長刀_{本作}薦_{ナタ}あづまの毛皮_元に用ひるるなり。

義徳方より差し候る腰廻りを、該の賛方と換式に差しゆ
ひ又を賛方と換式をお替り申す。附賛圓男の御取
守あて附賛も御、又トは御賛男の方に以下賛方方に坐ばり
案也天賛儀包の金和達等とも万石以上と積て仕立教へ
蜀身代ね更其てやれ
腰物寸尺身乞賛鞘より附文文政十一年二月擧
令条
費後ち象牙ノ出因付向合心極三年七月大日鑑之完
一刀二尺八寸九分三厘五毫八絲は多引上四
一大禪并大角潭太一寸八分八厘八毫六絲振る不固多引
一萬文半引一朱鞘 黄漆鞘太一寸八分八厘八毫六絲
太あでつけ左邊腰の方、右邊腰の方とも一おゆ
詰み又をもあち替て松役中用ひて仰き方舉之

益もや城内杖お用ナ候事當付元は既定てやナ
一 指灯より 指灯ハ上古より至りて古來以小松油を用イ
る。又以松油者少くゆるも多くあり。舊今年中ひづゆる
金殿成壁正月又有蠟燈歷の詳(系められ列と記)。復松
ニト以火一ツ持せ」と云。續ねハハシキつるり以號名今も用
ゆ。あぐどありゆく後以ふ持せものありそりと云。と
あはせを以とうちある。惣川記は云指灯ハ鶴指灯が云平せ
持指灯ハ古實に於之と平せあれどもてうちくらうる。矣
あはせにて鶴が持てふ鶴毛毛の如きの如きの如きの如き
世の如きもあへ。又以松油指灯と云ふのが火の如きの
やれき自是也と云ふて上本模本のとりてて持るやうは
ある。あつとも其事の如きの如きの如きの如きの如きの

持せるものと今の按第ハ淳田重象柄「始」と云一説
対の山おひ秀吉は時代布施ノ内との夫婦と云
長柄傘シテ昭和成年正月も柄傘おさむる所持
西くを失おきゆいたるを之傘と云者か柄の上に松
なみ筋とも云ふ方を差す。早充つゝ者安て事も有
孤の義と云はばは腰中あ法西くひ差し以後連からめ持
元有もつゝ途中うき達日各お取義もてみくらるる
やむじてあくとひとく既向ておまか依て遠やく來義の
遠みくらもやのひたれお集り 因云五傘と云
柄と云ル折り赤柄よりて用ひ柄ハ木曳も竹曳も又塗
る毛小骨も四一紙の白より袋ハ天竺城在地ホモ前打板
ゆて結ふ赤柄よりて袋ひへざるも又至内傘ハ袋の
より始といふ



一 経刀 滅充 鞘卷をかざとて満ひきを引うす事に蒙次
一 宛細川の波松甲斐子亦すも合はるにひらきを
小サ刀と云角巻をとが式の極よむゆる人あねと号ふ
限くゞぞ極極であるなり

一 太刀 重巻の太刀一尺、鞘卷とも云極鞘卷重河内守
金魚と表の役と並に柄糸の乞ひ兼房美津義義木を
若とひ裏ぬと云是ののとびがひそ利やべ

一 打刀 又浅刀とも云格れの写り見るに經刀にてす清山
一 宮幸二郎八分守小限の金井小刀兼ひあきと極辨のひす
袖少づる方小笄小刀をと首刀とて清山ゆりひはづけ
はあかのせ小あくび、短刀に犯を除くうるのとち遠
く武力に笄小刀を負ひ私當とうじ利家の日本正と

供の者不持せざるを以て腰より腰刀とし一腰より短
刀を常所より持めたり極大と名付其差は浅せ入刀を
そく常所より天子奉事中侍を以て腰より持つて其秀者
の良也と云うを亂儀今少のこより
一腰よりひりへ腰組とそもさ六寸、ぞう浅もく柄と卷
懐組より足利義政公のひまを懐より出でて懐ふされ
人もありて天文のひまを延べて腰とひま柄と卷
お刀抜(引)てさほのふきまち腰組の半風ありあたる
小虎丸一笄小刀の舟(舟)と用ひ一舟(舟)八分半程
一享保七年二月十日岩舟 沔狂にて刀懐組と人
小舟(舟)とある。もと人(人)近を祇舟(舟)の事なる
廢治代為ゆす。藤治代少(少)者(者)刀懐組と湧狂

人を犯す事無く其の心を治め得るに止む。左の刀槍をも宿す者
とさせざるを。右の棒は治代底の多寡によらず、中止せば
以て銀二枚、銅十六枚を支給す。怪中乃へ銀一枚を差し下す
○湯程の人に著敷いたる者あり。右内刀槍を上に置
之上限徳を乞ふ者よりお拂ふ事無考。左をせざるは左の棒
若き長老之人の儀を良か病よや立せず。今をを出旨。内
ち左の棒を左手に持つ事無考。右手衆町人を御史令等分
察り日め但も人を考究する事無考。右手の棒を換失ひのうとせ候
上を考究する事無考。左の棒を 宜之月
一株砲上流 大献院御代於後炮頭度々上流を走
空氣の内に正氣を立てる

衣服制度的例

不若以之又下于其間以發向之名則亦可矣第其附之而
父孫公安付也羽林主將軍吉人是時又欲發遣至京而不得
一引下勤之老發付多利之子 文化十二年二月有旨命中門
雜遜等同付方城左史官同卷史配宮內御圓丘桔槔弓
門下勤者于文淵閣記曰勤役中設浮竹葵叢於之
時拔太門下勤之老廢中向後移之又勤付以首尺量肩
而發付分付外四孔三勤牛走牛馬用以役水水船發役少子
脩也當南下勤澆灌同舟嘉之為奏而改付使繩索發

吟咏社附下多岐辰巳
吟咏社附下多岐辰巳
七月 桧葉陰裏
きし若ひ是を西の附とみへち社を以てお向に暮る第
て波ひそめあ附じうま什拍子のうと重平生を勿傷御
事佛事岡燃も若もお菊山巖の乃手引ひむ葵
也波あ菊い面く灵牌ホひまくち院にお納ひ猪具
モアお祭ホ也波付らふモノ法要とお引ひ儀
不善不 右之物ちねくやまた寺社まわり争波り芳
忠料私底ち社外きうち代友於之地波の争波り
七月 七月の物
昭和六年七月廿四日お世主殿を慶應殿
御臺附中ち葵也波付る京みえひちはるやむ

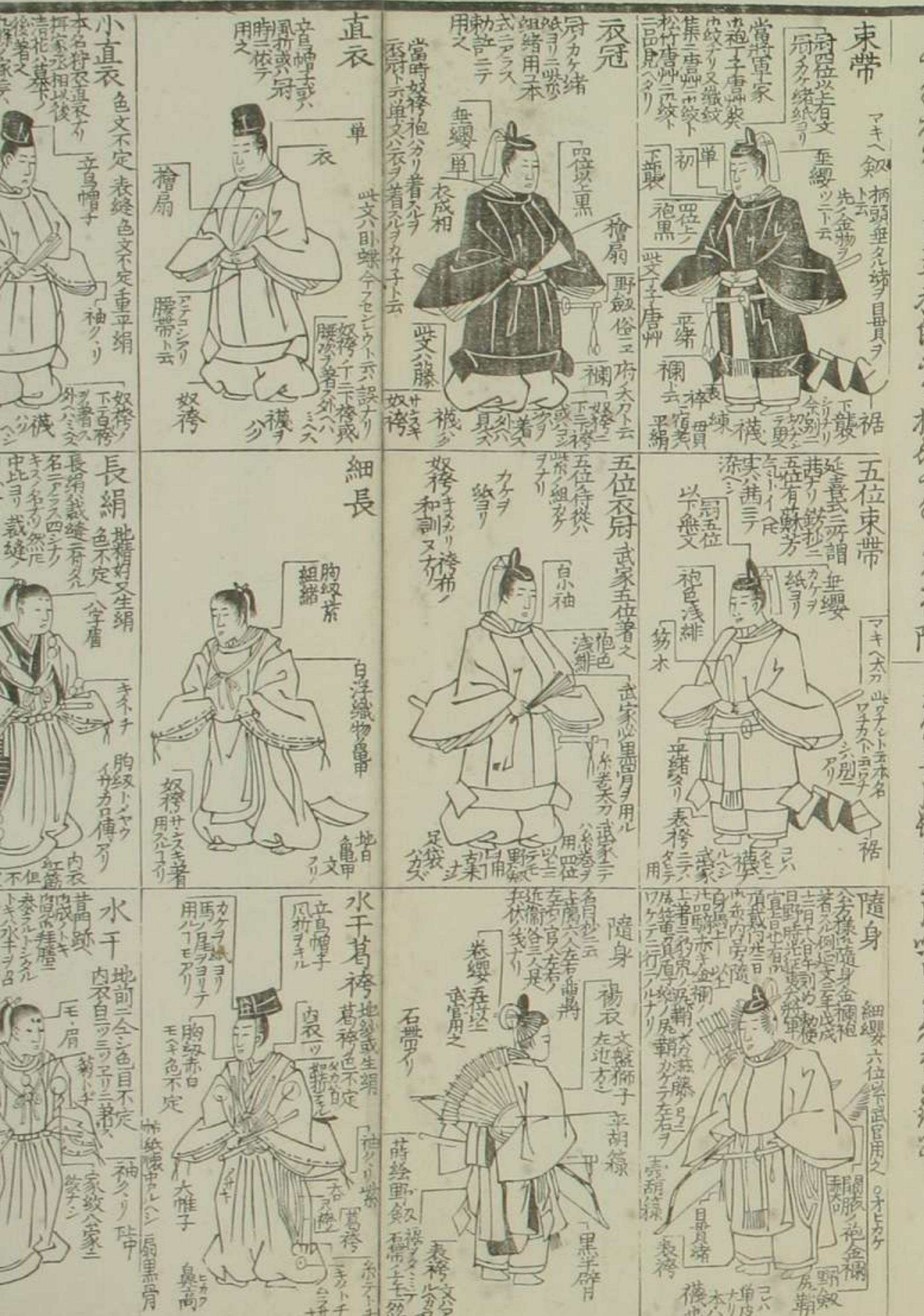
小鹿丸一斧小刀の脇元で用ひ一トモさく天守子限
一享保七年三月廿日也其付凶狂い一刃相送り人
小脇付外者も多。主と人共を底付けの事無事
廢治代為事す。即藤治代出立之者ハ刀根送至凶狂

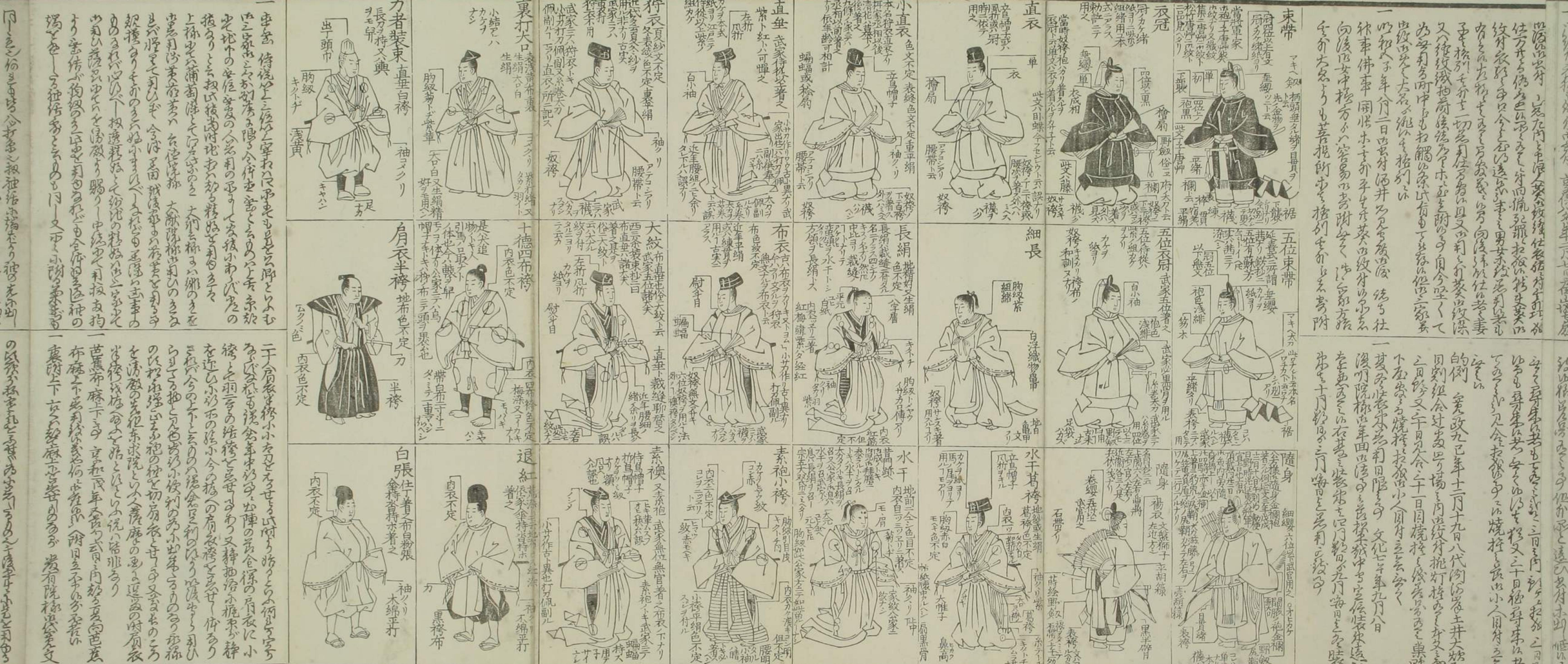
衣服制度的例

衣服制度的例

的例 宣政九年十一月十九日八代沟沥器土井大燃
因割纸合过事里場主内役村挑灯挂之并又和
之日除又午日又令之午一日因烧挂之终若只燒西之東鴨
不至矣之燒挂於旅舍小人因付立去安之
莫多燒者半分利日限之 文化七年九月八日

不教少極其在人骨也 橋上之傷先和食愈尔
因右之亦可猶之若下之是亦過甚也所謂
坐待以至運以船以乃止眾皆以處於內外者
之多於旁方東人後來以是故也食有不復出者
近來之病者供養無失初之而不忍之供早而乃止
於此者多不所由生之多也惜三人之死欲以車子之素
者空車而與財而重其死之氣也右之門於橋
之亡之未也多且少我死之善廢也私以之後
我方不遠以緣故之小府門也勿需亟元之羣小車
者一統也以之為之者立之肉之儼之遠之向
右連之又以之為之者立之肉之儼之遠之向
接借之以是多以之為之者立之肉之儼之遠之向





佩刀ノ所ニ記ス

奴婢

タカヒヨリ
カケタ
タマヨリ
タマノリ

卷之三

小井作古ト異也打刀佩副ル

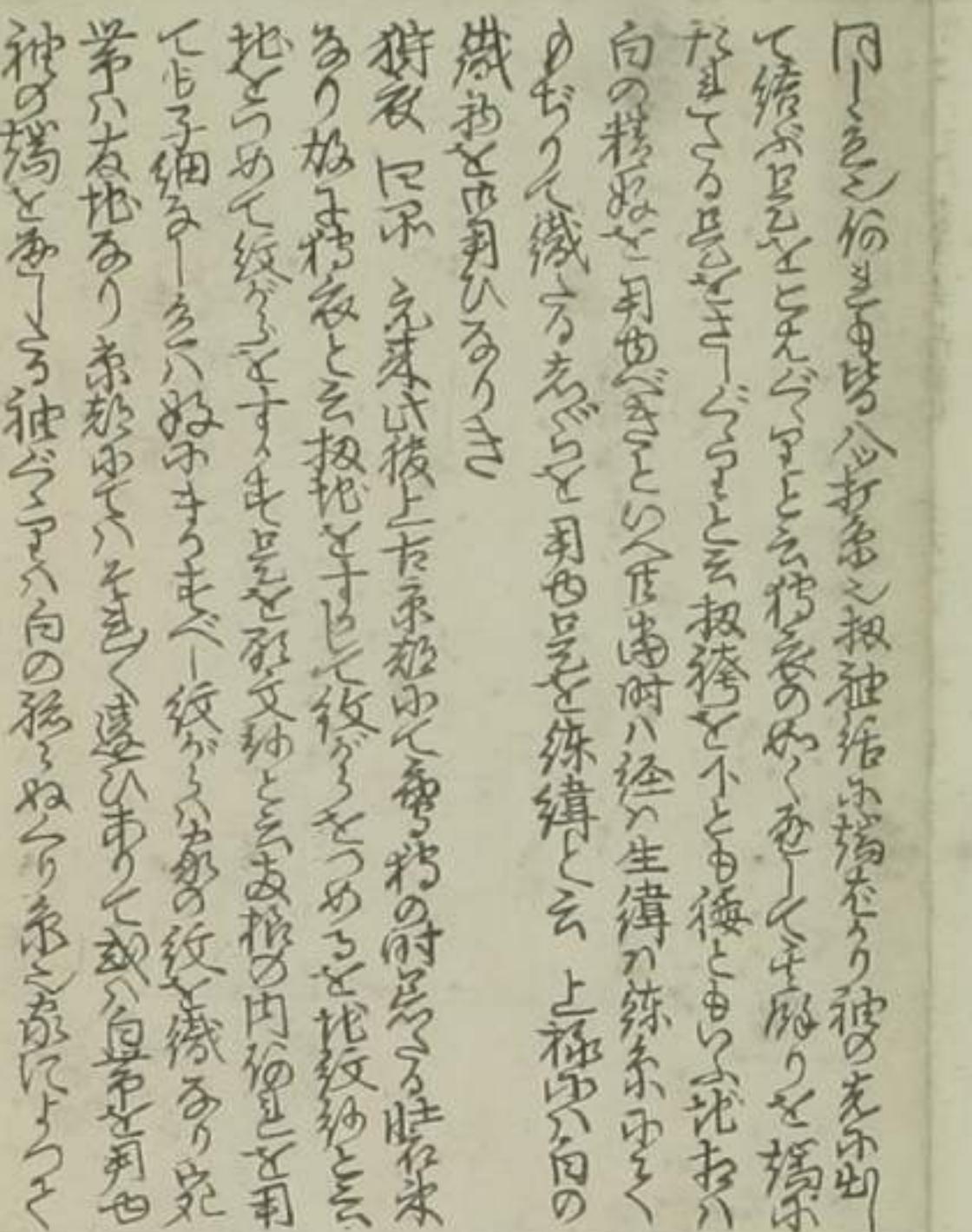


An illustration of two women from the waist up. The woman on the left is labeled '白衣不定' (White Robe Unsettled) and has a box above her head containing the characters '白衣' (White Robe). The woman on the right is labeled '白衣定' (White Robe Settled) and has a box above her head containing the characters '白衣' (White Robe). They are positioned between two vertical columns of text.

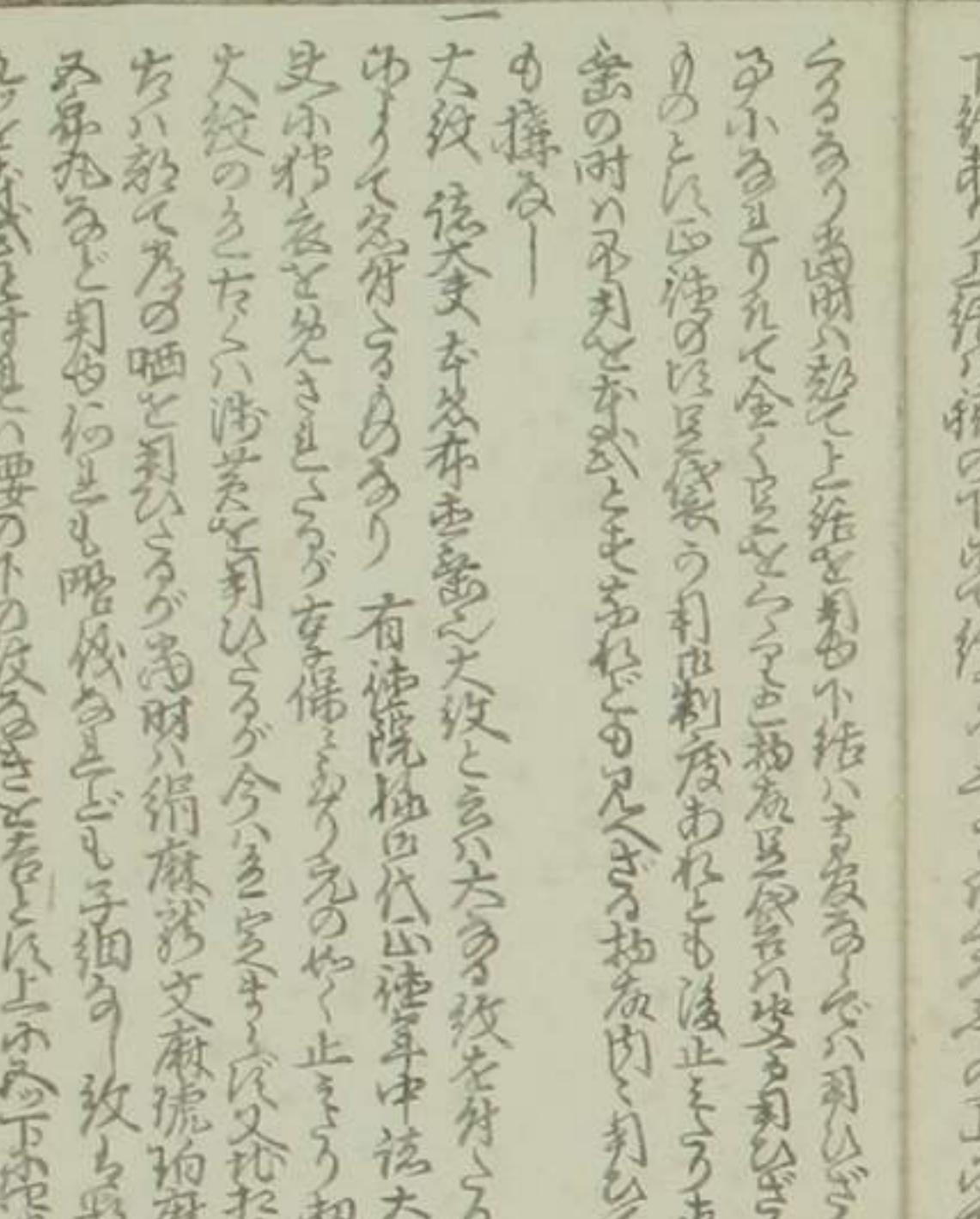


キクチ
漫遊
中三事
妻の侍従等と二侍従と寧ねひにあても是と云ふ御とりよむ
中三事あらか御考み限り今侍従を差と云ひやう矣承教
老比中の安佐家父の公私用の事すてを彼小あづちの
猿さりと云ねば後當附地おひがち精ぬき身もさる
上孫少六蒲萄酒とひる紫のと 大翁云極まひ鄉のをを
室喜利沙美菴あらか 古傳深孫 太麻院孫萬ひのきく
其が怪えて匂ひしも今は高田城後都の有無とありま
娘擣さりモアのまへぬ小さりぐれども正月の事の
ゆゑひ落葉せんとを湯殿すり賜り一中筋で利根並拘
よりまは傳不拘根のまほを用ひるがども今度是医神の
端と見てる御活あと云ひのも内一又西く小野の氣もあ

二千肩衣半袖小小を刀を差せよば附うち物と云ふ柄を定
多びなれども後年中より、か陣の兵士の肩衣に小
袖と羽毛の活袖とを差す。又舞袖活袖半袖表が舞
を逐ひる。不の様。今のかの肩衣袖とを差す。併あり
三枚。今のかの上下と云ひのへ活余。足利のひうは渡やも用ひ
らりて。う袖と色あら小役利のあら。お年うのう。舞袖
の上袖。半袖。ふも袖の袖を切肩衣とせし。又云ふものこう
を活袖の先。足利東求院といふ人。舞袖の上より。追風の内肩衣
半袖。或は。あらと活とひといふ。活ハ活也。あり
一芭蕉布麻下。す。享和四年。否ち式内。か。夏芭蕉
布麻下。芭角は。表や向ふ。か。芭衣
一裏附上下。か。芭麻下。芭衣のあら。岁有院。芭衣



且う又假羽織先て後彼とあれば至
羽織者美絶く其後もひままで端幅のゆゑに裏表之にわざ
に毫毛を取るとは思ひ難き行の給羽織少々を細かいが美絶
酒の量之車中乃是小々假毛織の事と扱事は居用の氣才不
ありてをもの事あぐ一むに幸めお高むるより又深入不破れ
お早よ此れ手をとす也又附院人金鑑 成美 公方様より出
上手の玉出羽織と號す ちやんと云極亂割羽織へ獨り
と号すと號すと號すと號すと號すと號すと號すと號すと號す
夏の玉出羽織ひれ背骨よりにて身をそのうち茶室丹波作の
茶室用ゆるるを例より 巻有院様代方法表文の後
湯ゆゆゆゆると月ひるゆゆゆ



・素袍のゆゑてあ猿と猿舟すれりて葛布又麻かわて被ふ際を被
けうそ土のよきよしゆくゆくは革故ゆり雲卵の季す。やう猶故う。今す
來船を半て雲昇呂を奉て移も差せば馬幅も由冠と深か腰
れ披ふ故者かす寔あよを以て干袖といひ医師の号す干袖ハ約
徳ゆう十種より型名ころものなり

一自幕是を小袖と當ふ因圓^{イニシヤ}まを接す多と不景之候は五ツ二
三萬束するヲ子頭ターメラ遠と前也(ゆ)へ更斗日と角子ノ一
向着袋と肩も今も因先門主の御事也。孫上小走大走多用
要ひますて向巾子と肩の腰附とも不著とりて左左ふあくに既
文化古事記月の集ふ山手行邊引背^{カヒ}吉原ありての附金爲御
供奉の内二入深怕子と肩の入体ふ向巾子小走もられすすみあ
とくらゆべ向巾子と肩ゆうりのとむくまき

附
明りあかり是て御みこ役ひやらねかも因まらねが
あ狗もり密結もる候神の場をあくる神社の參又革
とちをきと内ド緊きめりテ怪しき元われせ或あゆ
はる羽毛アシテおふ苦く也沙汰もく松繩ハ下とも接さ
り首の筋ねど引うひなまうれ木あら滑白布ホヌヒ若
くばぬけり重音大役さあ不第祭儀バトケレとも大
宴六客く參ルヨリモウタタキセマツギニ禡立ヤ
ト達タリ半武ノアラヒ入ベキタタキ今ハ略してハコ
トカリ神のはまひあてをまわるやあり

一
太波ヒ波面シテ 宽政十二年正月廿日太刀保妻尾寺
とき舞行三拂も祭事付多用おちひれを委託も多
太波役所附方移參定奉安敷大前月廿日より湯宿有

一
莫角倉舟のやとふらふ對をあらごのすとまく今ひらやく
あらのやとみ板ば役詫となまく織入へ喰えどりの元あれども左
あそきに仰せは月日より月日をと前やあらはほつ
よのゆりともと良小を良い筋引きどりたてあにあら
侍候に小ちりとも文化の深うるをあらまき筋引綴えども
仰手筋引とも出づけと倍ほんぐくも筋引くとくに思はれは
文化はまゆゑやて代替ひれの日月日をかわふ太ふらと
せし者まふ人をやむこゆゆ法みえ又は生産者ふは生産者
是を多角せむ板ば役詫のあはゆるを筋引筋引筋引筋引
足利の以裏櫻の山後ふけておきを切るを分て多角へ金風
とそ。よろからん後の筋引筋引筋引筋引筋引筋引筋引筋引

うるうる馬財へおとと姫をも下駄へまつるべへ用ひざる
事小きよりて全く立ちとくよ一物底是食合へ立と用ひざる
ありとく西浦のほほはいうれに制度あれとも改正をうす
金の附り不れどかがとまわあねども又えまうめあめうめ

太波 復蓋本多本吉家の大波と云ひ太波を付ける
ゆうて名前である。有德院極圓正徳年中該大
寺不朽衣と免きとさうが享保十九年やく止まり松
火紋のさぢくへ油茶を角ひつるが今へき定牛とて又地代
ちへ船で乃の酒と角ひつるが光明緋麻糸文麻琥珀麻
み算丸など東山の山も階級もども子細より改らぬ
かとをまよすとへ腰の下の波打をとひよふと下ゆ

附りあり是不承の之役いやむれの因三郎ふせぐ
あ拘りを信宿へも又飯神の場を廻る。神宿の事又柔
とちを乞と内どく安と身りて煙き続かれせ或處で
はゆの内すりあふ苦く也云沙宿を松櫛へ下とも接大
の白の檜根と引ひてをさうれたらから稍白布ホウヒ若
クは西川の事姫大綬せふある不孝を信びてつけられとも古
室六ふく參ふこともちのを今會せうづまき裾うやう
下縫身りがまくアモを入べきなれど今ハ略してしまひ又
志やり袖の仕事へかそをまわるなり
大綬を致すより 享政土申年正月廿日大々保支度を立
え候行多津も致西村易用おもなれを安藝守と

大綬紋下附方抄卷中卷之數大綬紋尚月之審法者
也右符大綬紋委友太和不妄寫也布衣本以布衣爲
裝束故名也此之謂也
布衣也き緊束本物也布衣と云ハ精衣のゆきは多ひゆく
足之ノ一傍袖、布袖衣とも名曰ひて古寒少ハ袖ノ一袖衣
と肩ノ一袖衣とてぢりうるべ布やて袖も布袖衣といひあり
えがきても先事をまく只の生ぬ只あら袖と肩もと
いども生産不取り多く布と肩ひり今其余がふくべ
布多の四役人づくを精ぬと肩ひ信良よりほどの絹
又あら絹の内で角田文化年中對列(胡辭は來被の
色とり由利を號す)きのう室寺神社ハ也衣不
印判せのゆれ若の羽ニキと肩ひ
素便合浦よ嘉慶川上古承ねてほき人の臣榮東翁にて

本て縫て文うもあくさうもあくさうもあくさうもあく
と内トよふ事きは裳本の一傳のふるい地あハ麻布を實
きり南國へス舟丸絹麻のねと剪也す船多あつて室
らぼ多くハ涉美衣をとがとをちハ大形の模様と付
或ハ上下とそりくるを又小紋もみーと拘紋業そちの處
ぬひする革をさきとび袴の裙不透と入ばせと附て入
長より下 絹麻を身りゆをまきり馬財へ綱麻を女のお
用ゆるの畠益みみと不織中ハ将へきやう文化八年二月
四條のち名綱麻の上下と身ひりまでるが内田少佐益
綱麻不若らるゝ又内年四月五日のあと大名が藝文と身ひ
方をあじづらも内と山田法と家の生孫の由ゆて押て
用ひねらるるをあらハ室寺吉ハ義とぞを云ひ

十六の義理の有る温ぬくは

自ら是を少壯と當て因ま多毛極て事と云ひ性をアラ
多氣する子猶モ一矢を遺す前也少々の御用に有リテニ
向坂と有り今も見聞の遼史向坂と少々大變其事
多才にて向坂と有り深附ある者とて度を云ふあり既不
文化六年四月往來於山中事務退引前著小きる時久修判
供奉の内二人深附多有の人物不向懶子亦爲知られる多キ
是より少子向懶子と有りありと存ル

莫肖壽也やふるがくを射ておどのすまへの志らず又双
あらのやとお板ば抜捨となめやゆくは喰まことの疏れども左下
あくまへ替へて月替りより右は月を日と前やあらハ正承
以下のゆゑと大をと良かを良ひ居別等と之たてにあら
侍従小ちりとも文せひそえ候まをあらま是用歎氣も
仰手肩も出ぬ活き儀ほひとすう候うるい用ひれど
文化のほひ空氣を以て代替送礼の日御目見が先小太郎を思
せし者室人を也知ふ事ゆ清ひまくは坐處度よひ山庭一之上
是を益利せむ板縁のあはる木屏風より抜き清筋わを
里利の良寒湯のひ候ふ才ておき切とて付て尋せん風く
とを。坐ゆゆる老撲の歴清風を角ゆるを

さよひ深惟子ハ贈文あり
序在向義多キハ寃讐事年青中間事中萬國事多々年用
不外也。憲義復得事也。至痛没事月少多事苦者也。往之方處
之處是役也。不相報也。莫同身也。古之亦少也。此用は極生亦少也。
御奉時被召第也。文化五年七月卒。其後也。浦ノ處也。是役
施之を以支記。冒見に上るが。其母也。號號也。役中事用
少も。不若也。向令也。心也。而。不若也。冒見也。役中事用
差。御奉也。御奉也。御奉也。向役勤也。老何役也。抱板中。得實
有。御奉也。御奉也。御奉也。御奉也。御奉也。御奉也。御奉也。御奉也。
一。御感の。明臂の。大。全。出。舞。半。於。羽。感。筆。を
用ひ。と。序。考。公。舞。と。用。ひ。て。筆。を。用。ひ。る。や。變。して。筆。く
明臂の。廣。器。舞。筆。下。於。御。舞。を。用。ひ。ら。御。舞。を。用。る
多。ふ。多。方。萬。時。ハ。向。義。多。舞。舞。至。を。急。す。一。キ。か。す。今
少。多。紫。歌。あ。ハ。歌。あ。ぐ。う。ば
一。夏。入。る。御。感。の。年。青。中。間。事。中。萬。國。事。多。々。年。用
少。多。義。多。舞。舞。一。夏。入。る。御。感。お。用。不。や。れ。お。然。と。方。法
向。右。も。主。も。出。舞。舞。を。ゆ。ゆ。ゆ。
一。革。大。の。羽。感。の。文。化。十。年。青。中。間。事。中。萬。國。事。多。々。年。用
少。多。義。多。舞。舞。一。夏。入。る。御。感。お。用。不。や。れ。お。然。と。方。法
向。右。も。主。も。出。舞。舞。を。ゆ。ゆ。ゆ。
一。革。大。の。羽。感。の。文。化。十。年。青。中。間。事。中。萬。國。事。多。々。年。用
少。多。義。多。舞。舞。一。夏。入。る。御。感。お。用。不。や。れ。お。然。と。方。法
向。右。も。主。も。出。舞。舞。を。ゆ。ゆ。ゆ。

の病方へ終の極板に互換くして初と後ふつけ付か
てあ方へ引奉らうが今ハ切て別か付らニ又福ふくアモ
ハキ途半花の吹ハ結り上るタガニヨリテ今ハ勝
ル御徳を却て紙すきノ御山ナムニ至深又沙子の
多岐首見ゆるナムニアシバキ跡差きの毫ヘ急用ベアビ
サトキト 勉ちよかと云あひ里利の日本抱のるアリと
今之止ムアシギ三利代義滿の附内地の金錢貯
元也かをうば財政中団發支ヒテ此の面ニ嘉慶の被と
征とを移すとそシテ是ナシトの形相まうとぞ又至度
大の義理の有ニ温皇へ出陽流の良小供生の因モ元

御成先諸的例

一帝成帝遼陽勅切場事 宽政元年十一月
丙寅朔旦拂曉先遣使至連移立初場
而定安在拂曉先遣使至連移立初場
不以爲相固忌之拂曉先遣使至連移立初場
且令多數役人立初場而拂曉先遣使至連移立初場
以拂曉先遣使至連移立初場而拂曉先遣使至連移立初場
之通拂曉先遣使至連移立初場而拂曉先遣使至連移立初場
之多數役人立初場而拂曉先遣使至連移立初場

墨渦を以て御内閣老向を引ひ奉る合せ事奉
先の半身も清向方引び候不候ゆ
御内侍供奉所免事 享保十六亥年五月
久方様大納言様御中 御成と是れ雨後より御供奉
急に食羽上程 御内侍向後着用可仕但 徒葉山
御冬前急を惟今退と通するアリ但左肩當番之時
与力内侍も足斗ぬヨリする格甚考平佑可仕事
御成と是れ御用快ひ執筆 宝曆五亥年十月吉
太納言廉豹場時々御感と以て病次狀を呈持系付承井經
吉國の御遠山縣をうけ其事御差遣奉元一馬十月土日
太納言様豹場筋より所付持る事無成也あ表門通

諭尼通書は書面を書くやうに當松は其の事実を通書獻
未滿此第居尙端次、是も考據用快矣。若然休休五向
諭成度々發使、要不如他方、諭成先主或再通書。但不
氣也。事在兵、接通事無尙。而諭も窮屈常事不
有也。通序お似、諭乃為尙底少、ハ安ん侏乃万一
諭成先主脅力辭之、或曰、不り焉。何、之斗丁、或人合昇
懸也。迎も、諭撫、義難仕を致り志解し。吾諭法も、諭通
從文苦矣。は外以才、迎辰者も、乃發物も、吾所集也。也
と爲人者と争て、因私私私私私私私私私私私私私私私
肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉
父牧野根、御用入焉。諭遂方考校へ附。是達、免別張
永井知事、亦未作。以諭成送通序先主。諭尼通筋也。

之是爲鵠鷀 遷附禽食令中入山山因光澤名
以禽也而赤人沒先通其法以火面口往不夕上弓矢深
者常設槁阱而取之或有火燭者以燭夜夕方出毒酒於
火左通一亭成之長矣而用石系石甚少摩若如
何故也外者生之其後海中也有之以爲故也是
身後骨以熟著使火以火太弱之多而用之多而乃固
以燒方氏通是爲易文或通火不飞炬火而燒方引際其
門通而得見通哉多不中而道而樹互通火
也或亦通火之以每丘火加晚十日 遷附之以安附
門 通濟東北津同勢火小火或通及往火偏西火日光
而用扇火障狀象形之而有承孔孔以火也松平内侍也而
安通火道筋之多也該鵠鷀之吳服槁阱之火通火方火

一夏の羽織より毎保三年八月九日因持傳す及第後
安國が義姫が御内へ一夏の羽織お用承られお被り方様
向むまわるかと申ゆてゆふ
一草の羽織より 文化十一年八月冬承被りて不聞
少ゆ西の御陽面柄又は鳳凰を地に 質直又は場へ立祇
之舟主是后連ひ承先君傳承とし者よりの具で候正乃致奉
之後同之の仕立を承る草の羽織お用承若く。前此而
出更に良石連ひ侍今も老草より羽織急相に候事當より
手てぬれ未だ火の場門外を差す。分明纏め縫合の所と申せらば
易利安吉を御と申ゆ

左錫の寛父父子清刀を歎び又父子も清刀父も同す旨
父等也。嘗て社上太宰起居郎・亦良重内拔を下さる事人
道春之記より
一 追手鷹。始 嘉保三年三月三日於戸初高追手鷹。毫年
八歳以葛西川从御成御成御成御成御成御成御成
と候。憲廟の天和一年御参のを廢せられて御成御成御成
嘉保元年御再興。先後復しては三年坐薦而小大被
庄 作有。四年十月廿七日初御物御物御物御物御物
一 嘉保元年七月廿二日太保も御成御成。○御参場共御成御成御成
生御成御成御成御成御成御成御成御成御成御成
五年内を通じ作有。○鷹白也。蔓食鷹。よまと鷹也。九

一享保三年十一月廿四日 今夜西村喜之助より
多羅麻持と申す事からうなづけたる所にて是を申す事より月日
傍えの處守獄門がりは改めて水川省とて 即發義下
西もお改めの爲料や付且又當夏中
無役令に由ゆる船在山木、物入りの故に因變にあら
何より成る處を度々高法衣と拂獨筆にて假人を至る
改宗す等すが事は象山後右体にて云々き者有之矣
而亦早運ひ死したア御先君のアマヅシテの誠教
ムと咸豐十月右に熟考して至矣

一享保五年四月廿二日附 〇去て奉立事中也舊白者
萬食馬鴨紙上且又音羽住多義由お達ひ内に大難有り自今
前お用の方はは白毛の萬食馬鴨と號を不紙上承まつた

佳能左近秋上モ或ツ定音多モ或ツ或ミナリの務也浮雲
車但亦不外もともと紙上紙モ才通て其相人脣下〇
萬食馬鴨紙上且又音羽住多義由お達ひ内に大難有り自今
前お用の方はは白毛の萬食馬鴨と號を不紙上承まつた

御道筋も遠
御同僚本意取扱事を十通とお尋ね致
通筋歩道筋也了了御承りお詫び申す
不察従事多事門事 還筋お詫びを乞ふ考お通
摺仕候孫室御歎ヒタヌサリ
御成島歴史 竅政七年十二月二日間符(同会)擧外
御地甚遠 御成島事務所御足通致人為至事也之也
途々遠少有之初火車場役役人方半外次消人役通摺り

上落を歸て此院事大
事務考方考ひ始て水而用鰐吉肝蒸其後付改え荒不
良船并水主考方ホリ後有十九年同慶保二年七月五日
高川後 上流有レ渡廟跡代宝曆十年七月五日高川後
上後城後九年同七年同五年同木板有レ渡今又連絡之
元文丙申年七月薄暮舟 犬尾太郎の孫大墨仁左支一酒獵
古家本守村左助清地村秋祭社地より薄暮又レ也傳
東在牛場と立志山至齊妻乃行不お爲外不外心佐助善

御成内志根ノ事有ニシテ也。而おもてすより近名も居
故上介會多西之氣拂乃回。而後方を身に余上ヒシテ
斗ひ万一危方不若合策仰きても可也。方略更令五年經
可矣。爲能

左馬止 佐付山中、被のひに御之又犯有と而も考へて其事無
即依弓ミ前報射ぬるテ 宽延二年四月十二日

今大御内火、後院内火、御内火、御内火
右後三事御拂毛モ不共火清役お通ヤハ賄候
事半事少シテ御内火修業也る場内事求
高兵械御拂毛御身出令也石手事やる事ア古廟或ハ
零落も通事手可ヤ考収事御内火御内火を移行ナ片事アハ
大手事アハ斥駁ナ一屈伏シテお通ヤシテ
金言事保年中紀伊守邊ノ而代奉日不詳正月比上垂
御美清之子内火麥達也只有火火清役上田源左馬人殿
御通駁シ物乞事ア難ヘとも失礼事高伏先波足備議

乙未薄暮正月廿一日時致三上
御慰勞矣然亦
猶射 上疏 宝曆四年十一月
御用也 乙未歲之歲也
射 上疏 享保土年平十
月十五日 獅射 上疏
主 你付之翌十六日為正歲
時振弓矢於五日獅射御用也 你付根也指南位不
舟而南極東北之方故以太常也勿令勿須御射御射年四列

人を多事に當る者を制す不兵休九物成ら制方不及力モ上
源方も往々と手辟をすと多平基不非か素の内也少般も
防邊方も防候内も其事の發成月當も、而も其中も西相
主義濟外も多基事も後事も御役主も有り
御成し若屋中挑灯も桶もナ、而威も若辻も而紫
武美上世端上也、而系徳も若桶も御事も又桶も而
義自が挑灯も桶も御事も桶も御事也十桶も勿役役中御役
御子役アえ物も御事も御事也ナ但先年も是中も若桶も又桶
不争も御事も奉文も通事も御事也ナ後事も御事也ナ
御成し若屋中も多基事も御事也勿役也勿御事也ナ
遠、而威も若、而服も勿役也勿小体、湯場も御事也勿御事也

坐松平伸翠巣巣立作波
小笠原源七弔 狩井主内
長田義五年 津小姓組
湯井市之丞 山本義方弔
依田平次弔 舟尾市右衛
鐵城 遊 松平内記 大山萬
田十弔 名全二般免とく
左を喰十五首強射を免ゆる者とく
四百人を仰取く
又享和十三年三月十五日於多聞寺場強射神社事
免爲免四十八弱者を垂相々 懇商以施施施被也
小姓もよりむ味うるやうのよ

或而少体と爲又近嘉福神主本檍左家 帝少体
院川町御邊 湾少体所 ▲日足筋と名目累
龜泉寺 湾脇或ち上目家名主か後曾源家
御脇或川東海寺 御猿所 ▲度尾筋筋と名下
日足松琴寺 湾猿或ち天觀寺 湾脇不詳零
御脇不 ▲弱場寺と名弱場寺街用裏御脇所
大郷御居地と名百姓共傍接内 御脇所
金川筋と名西川泥羽村 御脇或玉川畠
村青縄村 ▲中砂筋と名四谷大本戸田安下
登坂 湾櫻寺 中村宝仙寺 御猿所接内
御猿所 法妙寺 奈良筋と名伊放生寺 御少体

一門炮 上燒 宝曆十二年四月十三日王子筋引
威於中里弓用薑製鐵炮 上燒引
一半的 上燒 安永八亥年五月初日王子筋引
威於中里弓用薑製半的 上燒引
二月九日於口承半的 上燒引
一索弓 上燒 寅政六年亥年三月九日王子筋引
威於中里弓用薑製小弓清々面シマツマツある之能 上燒
許外於腰弓在も之、肩も
一弓被堅弱 上燒 既近例文政十亥年九月廿三日弓
恩助 潤威於弓弓弓被堅弱 上燒引
七手弓 一胸對發 外レ力ハ手弓 但一二手弓
○同前 大掌左門 ○同前 舍弓腰弓 ○同前 竹田助太郎

高食筋之寺 上尾食村卷雲寺 御膳所
▲王子筋之寺 金福寺 御膳所 中里御膳所
御膳所 御膳所 下板橋系蓮寺 御膳所 ▲板橋筋之寺 一稿麻屋御膳所
御膳所 御膳所 王院 御膳所 或以鴻根村安穩寺 御膳所 ▲西野井筋之寺 西野井村家持寺 御膳所
御膳所 西野井村家持寺 御膳所 ▲扁筋之寺 扁筋村
御膳所 御膳所 河原寺所 外百姓家 御膳所 ▲志村筋之
志村延令寺 御膳所 庙小休下板橋系蓮寺 ▲小
糸糸筋之寺 小糸糸筋之寺 指定高麗發 御膳所 或牛糸筋達
昌ち御膳所 ▲御膳所 御膳所 或月暮里淨光寺 御膳所 或
梅室院 御膳所 或月暮里淨光寺 御膳所 或
牛糸筋之寺 弘福寺 御膳所

田移面一櫓廢抱屋殿 廉脂所或曰永代寺
序殿所 ▲大川筋之名源川靈雲院 廉脂所
中川筋之名大谷固村常善院 廉脂所
或曰久村百姓家 廉脂所 ▲宇喜多羽田
之助裏鶴村正圓寺 廉脂所 ▲坂本不動院
之助櫛江内村本院 廉脂所或曰元樹是院 廉脂所
或曰隅田村多主三七布宅 廉脂所櫛場總泉寺

▲玉川筋の長玉川源翁村 市猿所或玉川畠
村高隱樹 ▲中野筋高良四谷大本戸里下
谷发 廣野市中桂宝仙寺 市猿所深内妙
法寺 市猿所 ▲雜司谷筋の岳 佛龕。那
都院。都院所。法妙寺。市猿所。高田放生寺。市猿所

▲舊食助之房 上房食村卷雲寺 布膳所
▲王子勦之房 金福寺 布膳所 中里布膳所
布膳所 ▲巢鴨筋之房 一橋筋脛坂 布膳所 ▲板橋筋
筋之房 下板橋系蓮寺 布膳所 ▲子母助之房 梅田
村櫻王院 布膳所 或八幡根村安穂寺 布膳所 ▲子母助之房 梅田
筋之房 西野井村安壽寺 布膳所 ▲扁筋之房 扁篠背
御居船役場食所 外百姓家 布膳所 ▲志村筋之
房志村延命寺 布膳所 序小休下板橋系蓮寺 ▲小
糸糸筋之房 小糸糸筋家 摺澤高麗發 布膳所 或千糸糸村達
昌之 布膳所 ▲深糸糸筋之房 德法院 布膳所 或
梅室院 布膳所 或育母暮里淨光寺 布膳所 或
牛山弓弘福寺 布膳所 ▲深川筋之房 千

田移画一 橋廢抱屋後 布施所或八承代寺
序脇所 ▲大川筋之旁 淑川靈雲院 布施場
▲中川筋之旁 大谷回村常善院 布施所
或大和村百姓家 布施所
之旁美鷹村正因寺 布施所
之旁篠山川找木花 布施所或光樹昌院 布施所
或大隅田村多生三七布完 布施所 橋場總泉寺
布施所 橋場浮舟場 廣居松後 布施所 ▲小松川筋
之旁小松川仲惠院 布施所上小松村西福寺 布施
休武移井塙村移曼寺 布施所 ▲葛西筋之旁立石
南義院 布施所或弘法寺 布施所 ▲疊壁寺筋
之旁新漢吉御攝所 ▲市下川筋之旁淨光寺 布施所

時刻取方的例

志宗の正月十七日大日付にて同会期の割引と金利と上刻下刻と
唱はる處でたゞ後送仕業の事無く取扱いを年上刻為時と
中刻為半期と下刻と云謂ひ義少者也 久候玉門五級
が爲り規定と云ひて是を支度ノ所共而と無ふと云
寛政十二年正月既宿地元院役傍吉左衛門(同会主)、紫雲
猪之山の法金奉と云刻限を義付額の旨、上刻よりの貯
六、七、八月の迄に又かの時と上刻と云其の入用と義付額と
同会ノ既宿地元院役傍吉左衛門と云其の事務事務
拠手と申す所と申候て辰の上刻を午時六時半時正五つ時と
各丸方に申べらんと候すア依て猪之山の法金奉と云其の事
志宗の正月十七日大日付にて同会期の割引と金利と上刻下刻と

右時左振合掌便と參行上刻に半刻持袋を多分利子少
き宿坊林立院尙令と观通者度を制限し山の本道
法をもとめとて向合致ひる如則限と義は先例と傳ゆる所
日暮山方事不法式と老齋懸掛は老牛子も然也
是事に内壁寒寮日夜別處達危傍东堂二重境或弱
室寒とお泥有り掠一ノ月一重境と申へ五時二重境立所附
高野前院改ち、すひ前も弱と申へ之を或翁東堂より通
老牛子も亦此を申へとす刻限より遠矣之
或統政方間合はる中極上ノ刻至方時定と仰上刻と申す事
時も既と下刻と敷設未だ計方振出界外而無事
以次半間合掌の事す上刻九時中刻九時三半下刻と名居奉
東大坂平野を圍立弱と方と同合節則限村あく应用狀も附
改上刻と申す事自ら多かば改上刻と申す事
曆田表補亦來至今夜子ノ上刻入今夜子ノ四刻入今夜子ノ
初刻入今晚子ノ六刻入と有り寛政五年八月二日月中金晚子
血刻日出より入迨晝五十刻夜半刻。寛政元年十月太文五
齋南畠負方々細川越中守と同合充々庵附曉子丑寅朝卯辰
丑巳午晚未申夜酉戌亥子ノ内定。高野寺上刻向午中守と見
五年九月作勢ち肩方と同合之座名と申す一刻向午中守と見
五月中下刻ハ前ノ清刻也弱と申上刻ハ後ノ清刻と計徳不局未甚

不晚。曾方望。庚寅年九月土日届半支。西陵。首付。元。以易。之。余移
田。至。上。南。界。村。子。中。划。ハ。今。堯。と。昌。安。吹。振。ヒ。唱。山。火。但。仁。划。父。今。晚。第
一。次。シ。テ。入。居。子。中。划。キ。中。高。主。未。堯。を。唱。外。位。未。下。划。キ。ニ。歌。歌。ヒ。唱。山。火。
時。划。エ。方。門。ト。半。冬。华。生。夜。草。刀。官。年。松。半。虫。勞。火。通。ア。多。尚。合。核。
始。划。限。系。系。毛。毛。毛。方。划。角。區。区。界。張。零。ハ。可。内。晚。熟。至。晚。熟。立。
左。肩。生。家。委。佃。承。
登。巳。午。今晚。未。申。今。夜。酉。戌。亥。右。通。一。事。乃。或。人。晚。毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。
篇。里。山。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。大。崩。

高宗丙戌十七日大同府同舍鄭子期別上刻中別下刻
唱義書之於後遺信義書不取令寫書函午上刻為時
中別為生別と下別と名留其義、中別のが、乙儀と中別
改めに追定し義おもひを多事多難、餘者而と無ふあり
寛政十二年と理福城院施院以傍至傍(同舍主)、坂井
御す高山法今軒と高別限を養分取の辰ノ上別を申の
六月半時ノ代入る。時と上別と義書以入角、義書行内
而向今ノ移設所和門左と義の舟、高山より養分と義書
拠て、義書と義書と義書と義書と義書と義書と義書と
各死方ゆべから一門の後事と高山寺法今軒と義書と義書と
義書と義書と義書と義書と義書と義書と義書と義書と

卷之三

諸衙門所通行的事 貞享二年七月侍臣所傳目

今切に是れ改めし事 一寺ニ有る亦常昔代廟之後先叔
泰ま行家未至矣故今寺方處不差加りゆ 一寺後地ノ寺ニ
あひ久爾若寺ノ寺擇據寺ノ但而ありゆ 一室東西五層
軒今切擇りかて改め 一寺アリシ多相々私處入道寺
院滿之家日水を取る 一門經院は水を百十人アキテ
寺ナ一夜中悉切小通ミ但而室ノ角ノ捨別くゆ 一
段地主想る山中ノ宿主トモ可ト以寄り多若能
安モアリ 一長ニテヨリモ下り高物斗改めし事
あセリとも改めし事 一女ミ上トドケ改め坊主安
繁有くわの比丘尼小女ホ紳り取つて改め事
寺僧不養也トモ妻子育く者あく居多事モ

主事某女と夫を女房守、又毛汲山以町人妻子の房
而して家物を戸周内人並改尼等可參り。歷々と女
の宿役是を町家にて改める。せり下りて女房群
にて出産依て迄文六歩産く女子載車大有難波
徳人。嘉可お無事也。而も出産後拂本不令販賣其
中。徳一平年一毛汲女子於拂仁二月八日留居布

暮六時半明あは五時半を終るが其の後半は
約半時あるとみて宜しく思ふが亦可
能事度。七時半を過ぐて内久と連れて但
是又徳川義定をも。是れ六時十九分を計るが亦義定を今夜と申す事より
後は六時と申す曉と申す御用を以て有るが故に
西丸太鼓羽根改日四時半西丸太鼓之義定へ門を起てツ
時半時半に附人仕上西丸太鼓の折西丸小納戸改
名三宅源波写不掛合有り右付西丸四時半上至
王丸表六尺四寸付人仕是へ付原西丸四時半上至
西丸四時半上至
四時半四寸ホ又鼓曲天を以て四時半を鼓乃打張
又五節寫式目而左丸立時主主に付人仕あ無因
曲天合之門を鼓乃打張天又奥の掛合板歛弓弓生
内門羽根改日ヤ鼓乃付西丸蓋井御垂幕様
内簾中様通井前部垂幕御方と換井蓋行是切守
西丸少人同付繕縫乃鼓檜に垂す事無様外
内門徳方西三家方西三方以重行之術只此老中房
而可代虎山様代虎山萬政及是年か虎山城遷出
し居て少在表六尺四寸付人仕事事多所ありは故に此等
是又隣波写不掛合有り右付東慶吉原古
吉原古

一 小女おとめ 気きぬぬ根ね被はの肉にく 小女おとめ 二 み附みつき 小女おとめ 一 僕わたくし 捩ひく 拳こぶし
一 丸心まるこころ 男女めんじょ 一 あくび 男女めんじょ 一首いっしゅう 男女めんじょ
一 死體しふみ 男女めんじょ

半
五子あとナヘドリテモ生ノハ但脣約空ニシテ

諸御閨所通行的例

諸國に國石通行事　貞享二年四月内國所ノ條目
國事市を奉る事無くあら笠巾をぬへにて　一物も身不離
ひ身物の身离しテ蒙也女を物事も禁忌遇よラ女ヲ身を離す
云幕門役方諸大名奉向し良家慶不消有し身も改ひ不處
之身やうてあ換羽リたば着て身するもの也仍身主身侍欠身
二年肩奉行　一寛延二年舟便參拏脯肩上便集下一禮當
宴不身冒そシトハ急羽レ兵船ヤ赤店越事与他ノ因見ヒトハ禮當
聞所がる衆々身度身の身先規て身わらひゆ　△内裏御用
之身ニ車　東海道木若山ハ内裏武具ホ身前ト免

余は老母とおもて女房等、召せぬやう町人、妻子、僕僕
而して宗物、戸内、門人、改ひりて可なり。歴々と女中
の偏覆足て阿家にて改ひゆ。せり下りて女郎、屏風
にて坐處依て迄文、出産、女子載常侍たるを経宿
候。女可ね難い也。而らお産院机木不令時皆きり
候。一月一回、女子於候。二月八月四角室と空居
可なり。○福島清園所へ事。一改炮教
筒、中江老中改炮文を要す。一九、改炮筒、中江老中
改炮文を要す。一弓、大柄木板多所生かし。老
手取之くお急ぎゆ。浦賀、上船至前判、是、五
日、卯申、未時、火事、火災、火災、火災、火災、火災、火

被 祖 右内引 一 祖 右内引 一 宋太祖 王侯余
被 父母之妻也 一 上系 右内引 一 俊人右内引
被 父母之妻也 一 墓水 右内引 一 墓水 右内引
被 父母之妻也 一 墓水 右内引 一 野狐 右内引
右内通 墓水 右内引

御園所 年取 被食女上内引 一 素物 何撻
禪尼 乞於俗人の後裔又其婦 一 尼 乞於寺主及安
比乞尼 乞於俗人の後裔又其婦 一 尼 乞於寺主及安
繫切 乞於俗人の後裔又其婦 一 尼 乞於寺主及安
乞於俗人の後裔又其婦 一 尼 乞於寺主及安
乞於俗人の後裔又其婦 一 尼 乞於寺主及安
死體 男女死

右内通子承才由裁之若不審之体於有之可
以除以外者不及改但久為多之者多之故自
方出付可至之少者之經隨丁改之次年尚月
用內通才麻月晦日止之而日限不以近月
不度而女改次月改之以果未承父數不足之
至乃時在而多之勿通矣而寄之身也
右内通子承才由裁之若不審之体於有之可
以除以外者不及改但久為多之者多之故自
方出付可至之少者之經隨丁改之次年尚月
用內通才麻月晦日止之而日限不以近月
不度而女改次月改之以果未承父數不足之
至乃時在而多之勿通矣而寄之身也